

特集

新学習指導要領 に臨む

—ほんね オン&オフ ミーティング—

前回までの「ほんね オフ ミーティング」が、「ほんね オン&オフ ミーティング」として新たな一歩を踏み出します。その第1回目として、「新学習指導要領に臨む」というタイトルのもと、小学校、中学校の垣根を越え、オン（11名）、オフ（3名）の計14名の先生がたが4時間にわたる激論をたたかわせました。本文はそのエッセンスをまとめたものであり、通常のミーティングとは異なる紙面になっています。教育現場では新学習指導要領をどのようにとらえ、それにどう対応していくのかについて、各活動分野と注目されるテーマごとに構成しました。特集の最後には、座談会進行役の長谷川祐子先生と原田 徹先生、オブザーバーの小原光一先生よりメッセージをいただきました。

活動分野とテーマ

- ・歌唱
- ・器楽
- ・音楽づくり・創作
- ・鑑賞
- ・日本の伝統音楽
- ・〔共通事項〕



「思いや意図」を どう引き出すか

熱田：小学校の歌唱では、「思いや意図をもって」が大きなポイント。現行の「つくって表現」する活動での“既存の作品を創意工夫して新しい表現をつくる”という部分が、歌唱の活動に取り入れられた、ととらえている。「再創造活動としての演奏」がここに込められているのではないか。「音楽づくり」は創作に限定され、これまでの歌唱や器楽に含まれていた「つくって表現」の部分が、今回の事項イ^{*1}にきていると思う。ここはとても重要で、単に歌って終わりではないということ。子どもがどう工夫し、自分にとって価値あるものをどのようにつくっていくか、ということにかかっている。そのためには曲をしっかりと感じ取ってそのよさを理解し、音楽的な根拠をもって「思いや意図」を形成していくように導いていかなければならないと思っている。

原田：「思いや意図をもって」は、その曲が本来もっているよさをないがしろにしたり、子どもがつくったものを



●原田 徹（はらだ・とる）

無条件でよしとしたりすることではない。〔共通事項〕の内容も含んで、中学校歌唱の事項ア^{*2}に結び付いている。

熱田：例えば、“友情の美しさをこう表現したい”とか、“ダイナミックに自分たちで作り上げたい”ということ。そうした「思いや意図」を形成していけないと、どう歌えばよいかとい

う判断基準も身に付かない。

横田：中学校では事項ア^{*2}とウ^{*3}で「表現を工夫」が盛り込まれている。実践されてこなかったと見られているのか、と自問すれば「やってきている」と言える。我々の発信の仕方、伝え方に問題があった点は反省している。

原田：中学校では、従来合唱を中心に歌唱が盛んに行われてきたが、ただ楽曲の完成度だけを追求し、生徒が歌唱を通して学んでいるものは何かを明確に打ち出してこなかった。生徒一人一人のイメージや思いを十分に生かした歌唱活動を行っているのか、という問題点が指摘されている。

熱田：「思いや意図」を子どもの歌唱表現にどう反映させるかの鍵は、〔共通事項〕に示されている「音楽を形づくっている要素」を操作すること。その曲のよさを支えている、音楽を形づくっている要素を見付けて、そのよさをさらに強調したり、新たに要素を動かしたりすることによって、自らの「思いや意図」が実現されていく。そういう体験を積んでいくことがとても大切である。

「合わせて歌うこと」の意義

原田：「合唱」ではなく「合わせて歌うこと」という表現になり、進んで合

歌唱

原田 徹 先生

[墨田区立錦糸中学校長]

熱田庫康 先生

[さいたま市立大宮南小学校教諭]

横田純子 先生

[狛江市立狛江第四中学校教諭]

A 先生

[中学校・音楽専科]



●熱田庫康（あつた・くらやす）



●横田純子（よこた・じゅんこ）

わせて歌うことが強調されているようにも読み取れる。実際の指導にどう影響するのか？

横田：協同する喜びや、互いに伝え合ったり学び合ったりするというコミュニケーションの問題など、全教科で取り組むべき課題において、合唱は大きな教育的意義をもっている。ここ数年、合唱を通して教え合い学び合う力、コミュニケーション能力や人間関係構築能力をはぐくむことを課題にしてきた。そうした指標をもつ「合わせて歌う」活動は、音楽科の中核にとらえられてしかるべきである。

A：校内合唱コンクールだけではなく、音楽科の授業のレベルにおいて「合わせて歌う」ことの人間形成的な意味の重要性をもっとアピールする必要がある。

横田：「合唱」への偏りを見直すべきとの声に、確かに反省すべき点もあるが、一生懸命やってこられた先生がたからの反発も聞こえる。歌うということは体という楽器を演奏することでもあり、すべての音楽活動の基本ととらえることができる。他の活動とのバランスなども考慮し、音楽科として、どうして合唱なのか、歌い合わせることの意味は何なのかを問い直しつつ、実

践をさらに深めていきたい。

歌唱表現の手掛かりとしての〔共通事項〕

熱田：楽譜がとても重要。楽譜には、作曲家がコントロールしたものが書かれている。子どもが「いいな」と感じるところはたいてい作曲家によって絶妙な技法が駆使されている。そこで動かされている要素を意識し鮮明に表現することによって、この曲のよさがさらに伝わるよね、ともっていける。さらに、「ここには何の指定もないけど、こんなふうに歌いたい」となったとき、思いや意図を生かした活動、つまり再創造活動が展開される。作曲家と自分たちの思いや意図をバランスよくコントロールできたときにすばらしい演奏がつけられる。そのために楽譜を読み取る力を歌唱でも育てることが大切。そうすれば「どんな力が身に付いたか」と聞かれたときに、例えば「歌声はまだ未熟だけれど、音楽の要素をこんなふうにコントロールすれば音楽がもっと豊かになる経験を積み重ねている」と胸を張って答えられる。〔共通事項〕が示されたことで、こうした視点から歌唱の授業を進められるようになれば、とても意義深いことである。

横田：〔共通事項〕が設けられたことによって、歌唱表現を工夫していく手掛かりが明確になった。〔共通事項〕を橋渡しとして、子どもが何を学んだのかを実感できるし、学んだことが他の活動にも生きて働くようになる。歌唱では、歌詞の内容ばかりでなく、語感や質感といった言葉そのものとか

かわりからも表現を深めたい。

熱田：小・中学校の学習指導要領を見ると、読譜は小学校でしっかりやりなさいと言われているように思う。実践では、階名唱のときに必ず楽譜を見るよう徹底している。子どもはドレミで覚えてしまうと楽譜を見なくなるので、音と音符との関係が理解できるように、階名唱では必ず楽譜を見ながら歌うことで、楽譜に親しませるようにしている。

音楽的に自然な歌い方とは？

熱田：声について、現行では「自然で無理のない声」と書かれており、これは「音楽的に自然で、体として無理のない」という意味だったと思うが、実際には「子どもたちの体にとって自然で無理のない」ととらえる向きも少なくなかった。今回は解説書に、「音楽的には曲想にふさわしい自然な歌い方」、「身体的には児童の声帯に無理のかからない歌い方」と明記されている。合唱曲は頭声的な発声で歌い、わらべうたや民謡などは地声を美しく音楽的に用いて歌っていくというように声の使い分けをする子どもたちを育てていくことが求められている。

横田：大切なのは、頭声発声を否定することでも、地声の歌唱を推進することでもない。教師自身が地声で歌唱することに慣れていなければ、研究していくよいチャンスととらえ、子どもたちと一緒に学んでいけばよいのではないか。「合わせて歌うこと」を私たち教師の姿勢から子どもに伝えていきたい。

	参照箇所	参照学年・内容
※1	小学校学習指導要領 第6節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (1) のイ	〔第5学年及び第6学年〕 イ 歌詞の内容、曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって歌うこと。
※2	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (1) のア	〔第1学年〕 ア 歌詞の内容や曲想を感じ取り、表現を工夫して歌うこと。
※3	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (1) のウ	〔第1学年〕 ウ 声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合わせて歌うこと。

器楽

原田 徹 先生

[墨田区立錦糸中学校校長]

熱田庫康 先生

[さいたま市立大宮南小学校教諭]

渡邊直実 先生

[昭島市立中神小学校教諭]

A 先生

[中学校・音楽専科]

小・中関連の視点から 指導のポイントを読み解く

原田：小学校高学年では、「範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。」が事項ア^{*4}として位置付けられているのに対して、中学校第1学年では、今回「ア 曲想を感じ取り、表現を工夫して演奏すること。」^{*5}という、いわば小学校の「思いや意図をもって」^{*6}を受けた事項が最初にきている。ア→イといった順序性はないにしても、小学校側から見るとこれをどうとらえているか？

渡邊直実：日頃から歌唱よりも器楽のほうが読譜の必要性が高いように感じている。読譜力を付けることは小学校での重要なポイント。高学年になったときに全員が階名唱できるように目指して取り組んでいるが、なかなか全員とまではいかない。小学校の場合、器楽は器楽、といったようにその教材だけを指導するのではなくて、鑑賞と関連付けて——例えば聴かせてみて「弾むって音がどうなっている感じ？」な

どといったことに気付かせることが大切となる。そうしてから「では実際に楽器で演奏するにはどうしたらいいだろう？」というようにステップを踏んでいく。また、3年生のリコーダーでは、レガート奏がとても難しいので歌唱と絡めて指導することもある。レガートで歌唱させてみて「歌うときには息がこう流れているんだね。リコーダーで吹くときも同じ息の流れなんだよ」と感覚的に気付かせることができる。このように、鑑賞と表現の活動を絡めながら器楽の指導をするように気を付けている。

原田：楽譜を見て演奏するという文言は、中学校では記されていない。小学校からの発達段階を経て、中学校では当然ハ長調及びイ短調の読譜ができなくてはならない。そこで、まずは「曲想を感じ取り創意工夫して」というところから始め、小学校の事項イ^{*6}に当たるところが中学校では事項ア^{*5}と位置付けられているのでは。加えてとても気になるのは、現行の小学校では呼吸等に関する記述があったのに、今回それが外れている。中学校側で基



●渡邊直実（わたなべ・なほみ）

礎的な奏法にかかわってくるのがすべて網羅されているように思うが、現状を考えて、小・中の連携の中で器楽をとらえ直してみてもいいだろうか？

A：小学校で読譜への基礎的な取り組みは終えているので中学校では「さらに先の内容を」ということだと思うが、事項アが「曲想を感じ取り、表現を工夫して演奏すること。」となっているのが疑問。なぜ「楽器の特徴をとらえ」ることより先にくるのか。イの「楽器の特徴をとらえ、基礎的な奏法を身に付けて演奏すること。」^{*7}がなければ、曲想を感じ取ったり、表現を工夫したりすることなどできないのでは？この部分については教師が繰り返ししっかりと学習させるしかない。中学校の現状としては、どうしても歌唱による実践の意識が強く、器楽を扱う時間が減少しているのは確か。自分の実践でも現在はリコーダーを扱っておらず、ギターや和楽器に取り組ませている。そうした中、器楽において「曲想を感じ取り、表現を工夫して」がどこまでできるか、短時間でどう工夫して実践していくかがこれからの課題であるように思う。

原田：学習指導要領の事項順に指導しなさいというわけでは決していないが、

基礎的な学習が先か、曲から感じ取ることが先か、ということを実践する側で課題ごとに考慮する必要がある。今回の学習指導要領の器楽全体を貫いているのが何か、それぞれの事項で何をねらってどう工夫するのか、ということ。

熱田：小学校では歌唱と器楽が同じ並び順になっており、アを除いた並び順が中学校と同じ。小学校の事項ア^{※4}、イ^{※6}について次のように考える。まず、一人一人が楽譜に書かれているものを実現する、それが事項ア。そして、それをよりよい音楽として表現するのが事項イ。その支えとなる個人の技能が事項ウ^{※8}。全体の中で合わせていく能力が事項エ^{※9}、と解釈している。中学校の場合、読譜は小学校で学習済みという前提なので、「表現の工夫」が最初に述べられているのではないか。その支えとなる技能面について個人的なものとする事項イ^{※7}と事項ウ^{※10}が置かれている、と読み解いたらどうかと思う。

A：中学校では、自分も含めてこれまで技能を優先しているようなところがあったので、そこを改善するために、小学校に準じて、曲想を感じ取ってから技能を身に付け、自分の役割を理解しながら全体の響きを感じ取っていく、ということか。生徒自らが合わせていこうとする、というところに重要な部分があると思う。

「思いや意図をもつ」とは？

渡邊直実：小学校の器楽でも、中学年以上で新たに「思いや意図をもって」と明記されたことが重要なポイントになると思う。子どもたちが楽曲に出合っ、その楽曲を「再現」するだけの活動ではなく、「思いや意図をもつ」ということが、音楽の諸要素と直接かわるきっかけとなる。自分がどのような役割をもっており、どのような曲想を表現したいのかと考えることが「思いや意図」につながってくるのだと思う。



●A先生

A：現状のままでは、「曲想を感じ取る」ということはかなり難しい。今までであればまず基礎的な奏法を身に付けさせて、それから美しい音色にするにはどうしたらよいか、というところで終わっていた。器楽の領域において、創意工夫して演奏することについて明示されていなかった。「思いや意図をもつ」ことについて、どのように実践してい

くかが大きな課題だと思う。

渡邊直実：読譜力を付けるには、低学年よりリズム譜から始めて丁寧に音符と音高の関係を理解させることが重要だと思う。さらに楽譜から音楽的な諸要素を探っていくような指導も心掛けたい。

A：器楽における内容の取扱いは、中学校で「～指導上の必要に応じて和楽器、弦楽器、管楽器、打楽器、鍵盤楽器、電子楽器及び世界の諸民族の楽器を適宜用いること。」となっており、特に和楽器は「3年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるよう工夫すること。」と示されている。子どもにとって、箏や三味線は取っ付きやすいが、それだけではたして我が国の音楽のよさを味わえているのか。今までだと、ゲスト・ティーチャーを呼んで、よい演奏に触れさせるという指導がよく見られたが、それが技能的な側面に偏りがちであったという反省もある。和楽器などにおいては特に「我が国の音楽のよさを味わう」といった点をどう実践していくかが課題だと思う。

	参照箇所	参照学年・内容
※4	小学校学習指導要領 第6節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のア	〔第5学年及び第6学年〕 ア 範奏を聴いたり、ハ長調及びイ短調の楽譜を見たりして演奏すること。
※5	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のア	〔第1学年〕 ア 曲想を感じ取り、表現を工夫して演奏すること。
※6	小学校学習指導要領 第6節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のイ	〔第5学年及び第6学年〕 イ 曲想を生かした表現を工夫し、思いや意図をもって演奏すること。
※7	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のイ	〔第1学年〕 イ 楽器の特徴をとらえ、基礎的な奏法を身に付けて演奏すること。
※8	小学校学習指導要領 第6節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のウ	〔第5学年及び第6学年〕 ウ 楽器の特徴を生かして旋律楽器及び打楽器を演奏すること。
※9	小学校学習指導要領 第6節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のエ	〔第5学年及び第6学年〕 エ 各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。
※10	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (2) のウ	〔第1学年〕 ウ 声部の役割や全体の響きを感じ取り、表現を工夫しながら合わせて演奏すること。

「音を音楽に構成する過程」 をどう構築するか

江田：「思いや意図をもつ」ことの核となるのが「音楽づくり」。中学年以上では、従来の「簡単なリズムや旋律をつくる」が今回「音を音楽に構成する」となった。

渡邊泰祐：実際中学校では創作指導がそれほど盛んではなく、新学習指導要領からは「もう少ししっかりと取り組もう」という「声」が聞こえてきそう。音や音素材をどう音楽に構成していくか、という小・中連携を意識した部分が特徴的。小学校の「音楽づくり」から発達段階に応じて記述され、わかりやすくなった。

江田：その「音を音楽に構成する」をどう読み取るかだが、「音」と「音楽」との出会いを分けて考えてみてはどうか。小学校では、どうしても「音」と「音楽」を一緒にとらえてしまいがち。激しい音やゾッとするような音でも、それが音楽の中であれば受け止めることができる。ただ「いい音」「きれいな音」だけではないということを感じていくことが大切。



●江田 司（えだ・つかさ）

中学校の事項ア^{*11}に継続させることを念頭において、既存の作品をバラバラにし、それをもう1回組み立てるという実践をしてみた。「再構成」していく作業の中で、曲の仕組みを学べるのではないかと考えたからだ。例えば、16小節の『ひのまる』をバラバラにすると、組み合わせは16の階乗で21兆。この授業のあとでは、子どもがきれいに楽譜を書けるようになった。グラフィックなものとして楽譜を

とらえることができたからではないか。同じ音が並んでいること、反復進行、音のしりとり…などと5年生なりにいろいろと発見している。また、『春の小川』の歌詞付きの4小節を使って並べ替えなども実践した。このように「音楽づくり」の活動に「再構成」を取り入れることによって、言葉から音楽につなげていくこともできるのではないか。

渡邊泰祐：中学校では、創作の事項イ^{*12}が難しい。特に即興的な音楽づくりでは、プロセスが欠けてしまいがち。小学校の事例で、イメージに基づいて音楽づくりをする場合、構成まで至っていないような印象を受ける。〔共通事項〕にあるような音楽の諸要素をまず知覚、感受するといったプロセスが抜け落ちてしまっただけでは「創作」とは言えない。

江田：小学校では、「即興的」とはどのようなことなのかを考える必要がある。ある程度の基本的な知識が身に付いていなければ、「即興的に表現する」のは不可能なこと。「もっと自由に創作したい」といったとき、初めて即興性というものが出てくるのではないか。

既存の作品の活用を どうとらえるか

原田：小学校の「音楽づくり」の実践において、いわば真っ白なところからではなく、既存の作品を組み立て直す、再構成する、再創造するということが有効ではないかという提案があった。再構成を通して音楽の仕組みの理解を目指すというもの。創作活動を活性化していくためには、やはり既存の作品から学ぶという視点が大切か？

渡邊泰祐：中学校に入ってくる子どもがみんな音楽の構成や仕組みについてしっかり学習できていれば話は早く、発展的な創作活動が行える。例えば、『夏の思い出』などの既存の作品から反復、対照などA-A-B-A'といった構成を理解させることがある。その上で一定の構成をもった旋律創作に取り組ませ

音楽 づくり・ 創作

原田 徹 先生
[墨田区立錦糸中学校長]

熱田庫康 先生
[さいたま市立大宮南小学校教諭]

江田 司 先生
[和歌山大学教育学部附属小学校教諭]

渡邊泰祐 先生
[杉並区立東原中学校教諭]

B 先生
[小学校・音楽専科OB]

る。何の手掛かりもなく、ゼロから始めるのでは子どもは何もできず、めちゃくちゃになってしまう。

熱田：小学校学習指導要領解説書の16ページには「これまでは『既存の作品を表現する活動』も『音楽をつかって表現する活動』に含んでいた」と記されている。ところが今回は、そこをはっきりと分け、「今回の『音楽づくり』には、既存の作品を創意工夫して表現する活動は含めておらず、歌唱及び器楽の活動において指導するよう留意する必要がある。」と書かれている。従来は両方含んでいたことを知らなかった教師もいるかもしれないが、これを文面どおりとらえ、既存の作品を創意工夫して表現する活動は一切だめだとすると、先ほどの『ひのまる』は既存の作品なので、「音楽づくり」じゃないと言われかねない。それでは低学年からいろいろなステップを踏んで実践していくことができなくなってしまいます。私も低・中学年のうちは、メロディーがあり、そこに子どもたちが自らリズムを加えていくという活動を行うことがある。メロディーが既存の作品であるからだめというのでは、現場の私たちは自分たちの首を絞めることになりかねない。



●渡邊泰祐 (わたなべ・たいすけ)



プロセス重視の創作活動を 構想・展開するためには

原田：創作のプロセス重視という方向性は明らか。小・中連携を視野に入れた実践事例が増えるきっかけとなればよい。旋律をつくる創作活動について、「言葉や音階などの特徴を感じ取り」が中学校で示された。

渡邊泰祐：落語の一節に「箸を持って橋の端を渡る」というのがあるが、言葉の抑揚をそのまま旋律に生かすことは、よく用いられる手法。そういうことが明記されたということは、非常に基本的というかオーソドックスな手法をまずしっかりと学習せよということ。音階は日本の旋法や、五音階など扱いやすいものを想定すればよいのでは。切り口が具体的になったことで、指導しやすくなったのかもしれない。

江田：創作は音楽だけで考えると難しいかもしれない。歌詞の中に問いと答えが含まれていれば、そういう曲ができる。例えば、まど・みちおさんの『ケムシ』という詩は、「さんばつは きれいな」の1行だけ。詩が音楽として使えるようなものでないとなかなかうまく

いかない。実践で何度も経験したが、詩が中途半端なものではやはり音楽もそうになってしまう。短い旋律づくりを行うときに、私たち教師が詩と音楽との結び付きをもう一度考え直さないと納得できるものが見つからないと思う。

渡邊泰祐：私は詩をつくる段階から構成を考え、1段目と2段目は必ずA-A'となるよう指導している。詩をつくるというのは本来音楽科の活動ではないが、これも節づくりの一部に入れて考えている。既存の詩を用いる場合は、構成のしっかりしたものを選ぶ。創作コンクールを実施する際に、課題詩を決めるのには苦労する。構成力のある詩を提示しないと、応募してくる作品もとりとめのないものになりがちである。

B：創作だけで学習が完結するわけではない。他の活動を中心とする題材と関連付けたり、他教科等とも連携させたりして子どもたちが身に付けるべき総合的な力をはぐくむ必要がある。

渡邊泰祐：創作という一活動分野で終わらせるのではなく、「共通事項」を橋渡しに、他の表現活動や鑑賞活動にも活用しながら学習を深めていきたい。

	参照箇所	参照学年・内容
※11	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (3) のア	〔第1学年〕 ア 言葉や音階などの特徴を感じ取り、表現を工夫して簡単な旋律をつくること。
※12	中学校学習指導要領 第5節 音楽 「第2 各学年の目標及び内容」から 2 内容のA 表現より (3) のイ	〔第1学年〕 イ 表現したいイメージをもち、音素材の特徴を感じ取り、反復、変化、対照などの構成を工夫しながら音楽をつくること。

鑑賞

長谷川祐子 先生

[横浜市立西金沢中学校長]

勝山幸子 先生

[東村山市立東村山第四中学校教諭]

A 先生

[中学校・音楽専科]

C 先生

[小学校・学級担任]

館 雅之 先生

[横浜市立美しが丘東小学校主幹教諭]

渋谷政枝 先生

[さいたま市立春野中学校教諭]

B 先生

[小学校・音楽専科OB]

聴き方を学ぶ

C：教師自身が「曲想」を明確にとらえていないのに、子どもに「何を感じたか」と問い掛けてしまうことがある。どの学年でも漠然と「何を感じたか」ではなく、音色や速度など、子どもに感じ取ってほしい「目当て」をもたせて鑑賞させたい。

長谷川：ねらいを明確にし、そのねらいに即して教材を選択することが非常に大切。

C：高学年になると言葉による表現にも幅が出てくるが、低学年では、「何を言おうとしているのか」「何を感じてそうとらえたのか」という知覚の部分をていねいに汲み取ることが様々な活動で大切。例えば、リズムを速したり音を高くしたりというように、子どもが意識せずに行っているものを、教師が意味付けし、価値付けする。教師が音楽的な言葉で表現していくようにすれば、子どもたちもそうした言葉を使えるようになっていくのではないかと。

館：低学年だと「こういうことが速度なんだ」ということについて、速度の違ったものを比較する鑑賞を通してとらえたい。

C：鑑賞と表現の関連も重要。例えば、『木星』を扱う題材で、聴いてから実際に演奏してみる。聴いたあとに演奏することでフレーズ感を意識させるな



●長谷川祐子（はせがわ・ゆうこ）

ど、聴いたことを表現活動に生かせるような学習の展開を工夫する。

B：鑑賞と表現の関連付けはよくわかるが、要素を聴き分け感じ取るような指導に傾いてしまうと、曲全体を味わって聴くという肝心な活動がおろそかになってしまわないだろうか？

C：曲全体を聴くということは大切にしたい。ただし、何も教えずに「どう感じたか」を子どもに問うのはやはり避けたい。〔共通事項〕を通して「感受」の引き出しを増やし、要素を意識して全体を味わうような聴き方ができればと思う。

勝山：曲を聴かせていきなり「どうだったか」と聞いても、「楽しかった」などの感想で終わることが多いので、「何で楽しかったの」と聞き返すようにしている。それによって「テンポが速かったから」とか「リズムが飛び跳ねるような感じで楽しかった」など、音楽用語を使えるようになる。漠然と感じていたことが、教師の問い掛けによって音楽の仕組みや要素と結び付けられる。学び合う中で子どもたちの感じ方が広がり、「そういうふうに聴くと楽しいな」と聴き方も広がるだろう。なんでもありではなく、教師が明確なねらいや意図をもち、そこに子どもたちをうまく誘導する。無理やりではなく、子どもが自ら気付き感じ取ることを楽しめるようなプロセスを工夫する。そこでの「知覚」や「感受」の手掛かりになるのが、〔共通事項〕だととらえている。

音楽科で育てる言語力とは？

長谷川：聴くねらいをさらに焦点化するためには、教師も含めて言語力を育成することが大切となる。

勝山：中学校で押さえておきたいことは、音楽のよさや美しさを味わうための「手段」として、言葉で説明したり、根拠をもって批評したりすること。しかし、批評文を書かせることが目的化してしまうと、上手に文章を書



●勝山幸子 (かつやま・さちこ)

ける子どもだけが高く評価されるような間違っただけの方向に行きかねない。最初はなるべく抵抗感をもたせないよう「今日学んだ音楽のよさや魅力をだれかに伝える文章を書きましょう」などと言いつつ工夫する。教材の特徴を教師自身が明確にとらえていることが大切。

館：言語活動は全教科において重視されている。言葉にすることによって、子どもは自分の中に感じたものを返すことができる。言葉にはそういう意味や力があると思う。音楽活動でも、共通の言葉の意味合いが互いにわかっていると、伝え合うことにつながる。例えば、「これが強弱だよ」とだけ教えるのではなく、互いにその言葉を共有して伝えられるということを理解させたい。

渋谷：その曲のよかったところなどを書かせると、音楽経験の差から、感じたことをうまく言葉で表せない子どもでも、稚拙な言葉で書いたり発言したりするうちに言葉が出てくるようになる。ただ *f* が出てきたときに「強い」と言う子ども、「大きい」と言う子ども、「強いと大きいは同じか」と聞くと「同じだ」と言う子ども、首をかしげる子どもなど、聴き方が異なることは事実。そこでそれぞれの子どもが主体的に聴

けるような指導の工夫が大切となる。

勝山：ねらいがあっても、やはり生徒からはいろいろな発想、感じ方が出る。それはそれですごくよいと思う。批評文の中にそういう言葉がどんどん入ってきててもよいし、授業で扱ったキーワード以外のものがあつたからといって決してマイナスには評価しない。ただ授業のまとめとして、いろいろな意見や感じ方があつたけれど、この授業で学んだのはこれだということを生徒にしっかりと伝える。また、音楽科での言語活動というと、鑑賞がクローズアップされるが、表現活動においても大事。自分が感じたことを言葉で説明し、それを共有し認め合ってみんなで表現をつくり上げていく上で、言葉は重要である。

A：〔共通事項〕の用語などを黒板に貼り、あらゆる音楽活動で感じたこと、気付いたことを話すときにそれらを使うようにしている中学校もある。「音の高低からそう感じた」「激しいリズムからこうイメージした」など、音楽的な根拠を語るができるようになるためである。

子どもの学びを生かして 指導計画の改善を図る

館：教師が系統的に想定したことで、



●C先生

子どもたちが感じ取ったり学んだりしたことがずれた場合、それを指導計画の改善に生かしたい。また、音楽の指導計画は段階的というよりもむしろスパイラルに組み立てる、というイメージがある。〔共通事項〕の設定を機に、教育課程そのものを見直すことが大切ではないか。今、小・中学校を兼任しているが、中学3年生の授業時数では実際に系統的な授業を行うことはかなり厳しい。さらに活動のバランスについても、量ではなく質的なバランスを考える必要がある。

長谷川：そうした現実の中で、中学校では、これまでやってきたことを凝縮した、質的な改善が要求されてくると思う。

A：時間的な制約は厳しくなる一方で、多様なジャンルや活動への広がりも求められる現状では、やはり教材の開発や選択をこれまでとは違った視点から深めていき、指導計画を〔共通事項〕とも関連付けてリニューアルしていかなければならない。

「おいしいとこ取り」には 徹底した教材研究が必要

渋谷：授業が2、3週間ぶりというクラスも頻繁にある。はたして前時の内容が彼らに残っているか…。そのため、言葉はよくないが「おいしいとこ取り」を行っている。ほんとうはじっくり味わって聴きたいと思うが、現実に難しいとなればチョイスかなと思ひ、ここだけは、というところをまず聴かせる。作曲家にとっては、とんでもないことかもしれないが。

A：「おいしいとこ取り」と、丸ごと聴くこととのメリハリやバランスがとれていれば…。

B：そのためには、教師が子どもの側に立って教材を吟味し、子どもが興味をもって鑑賞できるような「おいしいところ」を選別する必要がある。

まずやってみよう

小学校 山内雅子



鑑賞領域で中学年に 和楽器がおりてきたこと

鑑賞活動の前に、少しでも和楽器に触れる経験をさせておくとよい。そのことによって鑑賞曲がより身近なものとなり、理解を深めることにもつながる。箏であれば調弦された糸を順番に弾くだけで日本の音階の美しさを味わえるし、たった1つの音を奏でるだけでも、音の余韻を味わったり、音を出すための間を感じ取ったりすることができる。

具体的な鑑賞教材として、例えば宮城道雄の『さくら変奏曲』などは、中

学年の子どもが集中して楽曲に耳を傾け、箏の音色や箏特有の奏法の魅力を感じ取ることができると同時に、和楽器にあこがれの気持ちを抱くことができる、中学年の鑑賞教材となり得るのではないかと思う。

また、身近な郷土芸能を鑑賞し、太鼓の唱歌を唱えたり、旋律や楽器の重なるの面白さを感じ取ったりする活動なども、取り組みやすいのではないか。

高学年の表現領域に 旋律楽器の1つとして 和楽器が入ったこと

旋律を演奏できる和楽器として、例えば箏は、教育現場で用いるのにたいへん適している。しかし、箏に限らず、篠笛でも、三味線でも伝統的な奏法(型)というものがあり、その型にのっとって演奏したときに初めて理屈抜きでダイレクトに心の奥まで音が染み込んでくる心地よさがある。どの楽器がよいということではなく、どの楽器でも、あるいは楽器がなくて「声」で取り組んでも、その特質や奏法をきちんと生かした指導をすれば、鑑賞指導との関連の中で、日本音楽の特質やよさを子

どもたちは自ら感じ取っていくことができると思う。

歌い方について

中学校では「曲種に応じた発声」「伝統的な歌唱」ということが明記されているが、私は小学校の「自然で無理のない声」というのも、まったく同じ次元でとらえている。

民謡を指導する際に、リラックスしながら教師が手拍子と口三味線でリードすると、どの子どももごく自然な美しい地声で歌う。他の種目についても「いい姿勢でお腹からしっかり声を出そう」というそれだけの指導で、よい音源にさえ出合えば、子どもたちはどんどん直観的に伝統的な歌唱のよさを感じ取ることができる。

幅広い選択肢を 楽しもう

中学校 渋谷政枝



とにかく触れてみる

伝統音楽の扱いについては、「伝統的な歌唱」、「和楽器」といわれる楽器類、鑑賞教材の中にも「我が国や郷土の伝統音楽」がある。特に中学校では、すでに取り上げられているものもあり、選択肢がさらに広がったととらえることができる。小学校での学習経験を踏まえて、それにうまく積み重ねていきたいという思いもある。

実際に体験をしてみると、そこからいろいろなことを感じ取ることができるのではないか。例えば三味線や箏なら、一音はじいたときに出るその音の

日本の 伝統音楽

長谷川祐子 先生
[横浜市立西金沢中学校長]

原田 徹 先生
[墨田区立錦糸中学校長]

熱田庫康 先生
[さいたま市立大宮南小学校教諭]

山内雅子 先生
[小金井市立小金井第一小学校教諭]

渋谷政枝 先生
[さいたま市立春野中学校教諭]

余韻や音色、また打楽器ならば一打入魂の精神など、洋楽では味わえないような何かを感じ取ることができるはずである。

伝統的な歌唱～器楽と合体させてみては

知名度はともかく、それぞれの地域に何かしら固有の音楽はあるもの。そうした地域に伝わる音楽の中から歌や祭囃子などを取り上げ、子どもたちに知ってもらおう。それは次の世代に伝えていくことにもつながると思う。民謡、長唄などが例にあがっているが、子どもたちにとっては民謡が取り組みやすいのではないか。コブシのきいた歌い方をまねしてみたり、少々うなづいてみたり、拍節感がないものやかけ声が入るものなど、歌だけを楽しむことはもちろん、器楽指導の中で取り上げてきたような三味線、太鼓、鳴り物などを伴奏楽器として活用する方法もある。歌唱と器楽を合体させることで幅広い表現活動が展開できる。伴奏楽器に和楽器を使うことになれば、当然、奏法の指導も必要になってくる。どちらかというスキル的な、弾ければよいことになりがちだが、それを越えて自分たちが歌った歌と合わせてみることをまず体験する。そこから生まれる独特な雰囲気を感じ取ることが大事である。

言葉と音楽との関係、姿勢や身体の使い方

和楽器においては、「^{しょうが}唱歌」という独特な言葉を使った器楽の学習法があり、たいへん優れたものであると実感している。しかし、教育現場ではまだまだ取り上げられていないのではないかと。^{しょうが}唱歌は、伝統的な音楽の学習の在り方を考えていく上で重要な鍵となる。また、和楽器の正しい奏法を教える中では当然、「こういう音色を出すためにこういう身体の使い方、座り方がある」といったことに直面する。こうした学習も一連の流れの中でできるようになってくるといいと思う。

「和楽器」の取扱いのポイントを確認する

長谷川：中学校の限られた時数の中で、和楽器の取扱いについてはどういう状況なのか？曲を弾くことが中心となるのか？

渋谷：限られた時数の中で扱おうと思っても、1年間はほんのわずか。実際に子どもたちが段階を踏んで体験から学び、疑問を解いていきながらステージを上げていくには、やはり2年間、3年間というスパンでとらえなければならない。例えば『さくら』の場合、ただ箏の弦をはじけば簡単に弾けるから、という理由だけで取り上げるのもったいない。「箏で『さくら』を弾く」だけで終わりにするのではなく、その先の、「なぜ『さくら』を選んだのか」を実践していくような展開を構想できると思う。また、活動の中で、「音の合間にほかの音を少し入れてみるとちょっと華やかになるな」など、子ども自身でメロディーをつくるといった、教師が予想もしなかった展開につながっていく場合もある。さらに、鑑賞活動でできるだけいろいろな奏法を見せることにより、子どもたちは一層興味・関心をもつ。例えば、吉田兄弟の弾

く津軽三味線を「まるでエレキギターみたいでカッコいい」という感想をもつ子どももいる。「興味・関心をもたせる」ことも教師の重要な使命だと思う。

原田：小学校の学習指導要領では、今回配慮事項として、高学年で取り上げる旋律楽器に和楽器が位置付けられているが…。

熱田：確認しておきたいが、和楽器が今回の改訂で新しく入ったわけではない。現行の第7次学習指導要領でも同じように「我が国や諸外国に伝わる楽器など」とあり、「我が国」という言い方が「和楽器」になったととらえるべきである。第6次でも和楽器という言葉は用いられていた。つまり、これから新しく和楽器を始めなくては、ととらえる必要はない。変わったのは、中学年の鑑賞で、教材選択の観点として「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽」という内容が示されたことだけで、日本の伝統音楽の扱いに関して、小学校では用語の使い方以外に変更はないと判断してよいと思う。



〔共通事項〕

長谷川祐子 先生
[横浜市立西金沢中学校長]

江田 司 先生
[和歌山大学教育学部附属小学校教諭]

渡邊直実 先生
[昭島市立中神小学校教諭]

横田純子 先生
[狛江市立狛江第四中学校教諭]

B 先生
[小学校・音楽専科OB]

C 先生
[小学校・学級担任]

熱田庫康 先生
[さいたま市立大宮南小学校教諭]

館 雅之 先生
[横浜市立美しが丘東小学校主幹教諭]

勝山幸子 先生
[東村山市立東村山第四中学校教諭]

渡邊泰祐 先生
[杉並区立東原中学校教諭]



●館 雅之（やかた・まさゆき）

指導の「明確化」を図ることができる

館：「～を工夫する」という表現は指導案などでもよく用いられるが、「どう工夫するのか」についてはなかなか明確にされていない。〔共通事項〕に書かれていることを操作することが一つのヒントになるのではないかと。特に小学校の場合は学担が教えるケースが多く、音楽の授業で一体何を教えるのか、ということが今までよく話題になった。〔共通事項〕は教師がこれまでも扱ってきたことではあるが、あらためて明記されたことによって、音楽で何を指導したらよいかの方がより明確になった。今次の学習指導要領全体のキーワードの一つが「明確化」といえるのではないかと。

〔共通事項〕の課題として3点考えられる。①用語そのものの理解。「問いと答え」など、今までにない新しい表現が使われているので、それらの概念をしっかりとらえる。②指導計画への位置付け方。誤った負担感をもたず

に、指導計画への反映のさせ方、扱う教材と〔共通事項〕との関連を整理する。③6年間を見通した取扱い。低学年から高学年に向かって〔共通事項〕の内容はだんだん増えていくので、スパイラルな形で扱う。6年間を通して〔共通事項〕をバランスよく位置付ける。

「音楽づくり」の項で「出合う」ということが話題になったが、どのよう



●横田純子（よこた・じゅんこ）

な音楽との出会いが子どもにとって大切なのかを教師が考える上でも、〔共通事項〕は鍵になると思う。

横田：〔共通事項〕によって音楽的な用語がクローズアップされることは大歓迎。こういうことを明確にしてこなかったから、子どもにキーワードとして与え教えてこなかったから、他教科から音楽科が文化的な背景をきちんと学習させていると認められなかった。例えば「間」などは、歌唱でも、創作や鑑賞でも扱うことができる。〔共通事項〕の新設によって、これらのことを手掛かりにして扱っていくことができる。

渡邊泰祐：教科の存続についての論議があったときに、「音楽科で子どもたちに身に付けさせる学力とは何か」という問いについて、現場ではなかなかうまく答えられなかったかもしれない。そこを変えていけるチャンス。

勝山：〔共通事項〕を手掛かりにして学ぶことによって、例えば音色と旋律を扱った授業であれば、その授業で学んだ音色と旋律が鑑賞の授業で扱ったその楽曲だけではなく別の楽曲を鑑賞するときにも生きてくるし、表現の活動にも生きてくるのではないかと。

「架け橋」としての 〔共通事項〕

熱田：小・中学校で言葉の使い方にも多少の違いはあるものの、「音楽を形づくっている要素」を土台に、本質的に同じ考えで記されている。20年度の関東音楽教育研究会でも新しい学習指導要領の実施を見据え、〔共通事項〕に当たる「音楽を形づくっている要素」をどう授業の中で扱っていくかを提案した。その際最も気を付けたのは「〔共通事項〕を取り出した授業にならないように」ということ。それを象徴するものとして「〔共通事項〕を架け橋にしよう」という表現を使った。すてきな音楽の世界に私たちを導いてくれる架け橋である、と。別の言い方では「自分たちの思いや意図を音楽に反映させるアイテム」である、とも。かつて「基礎」領域が置かれた時代に、基礎だけが独り歩きしたり、ペーパーテストが増えたりしたという。そうならないように注意していくことが現場の使命である。

渡邊直実：小学校段階で身に付けさせたい基礎・基本の一つとして、拍の流れによって演奏できるよう指導している。具体的には、低学年のリズム遊びにメトロノームを取り入れたり、いろいろなビートがはっきり聞き取れる曲を聴かせたり、拍子と身体の動き、例

えば3拍子と横の揺れや円運動的な動きとを結び付けたりしている。〔共通事項〕は新設されたものではあるが、内容的にはすでにしっかりと盛り込まれてきており、自分の実践を振り返る手掛かりともなる。

渡邊泰祐：新しい文言が出てくると最初は戸惑いがあると思う。例えば「テクスチュア」などは、仲間に尋ねてみても、半数以上の割合で答えられないような印象がある。小学校で示されている「縦と横の関係」とつなげて読み解いていく必要がある。小・中学校間の日頃からの情報交換がより大切となる。

勝山：〔共通事項〕は、音色、リズム、速度、旋律、強弱など、感じ取らせやすくして自分の中で扱いやすいものと、テクスチュア、構成など、どのようにして教えていけばよいのか、自分にとって課題となるものがある。

C：子どもにとっては「高い」と「強い」がほとんど一緒の場合も少なくない。〔共通事項〕と関連させて、概念をしっかりと整理して教える必要がある。

B：〔共通事項〕の概念を教える際、例えば、*f*の部分を聴いて「鋭い音」と答えた子どもの発言を切り捨ててしまい、「強い」という回答のみを求めるといったような指導は避けるべき。



●B先生

関係性の中でとらえる

長谷川：共通事項に示されている内容を意識しないで指導していると、何となく聴いて終わっちゃった、何となく聴いてよかった、楽しかったで終わる危険性があり、一方で、〔共通事項〕をあまり知識としてとらえ過ぎると、B先生の言われたような危険性もある。

江田：〔共通事項〕をとらえる例として、まったく同じ部品でできた2枚の似顔絵を用意したとする。1枚は顔に見えるが、もう1枚はそう見えない。「福笑い」のように目や鼻を無造作に並べ替えてあるからだ。たとえ目や鼻があっても、それらの「関係性」がくずればもう顔には見えない。例えば、子どもたちが顔の絵を描いた（見た）とき「目にもいろいろな描き方があるな、表情はこんな感じだな」というように、顔を構成している「部品（要素）」とその「関係性（仕組み）」を感じ取る力を育てていくことが求められているのだと思う。目だけを取り出して描いたり比較したりしてもデッサン力以上の意味は得られないだろう。すなわち音楽を表現したり鑑賞したりするとき、リズムや速度などの要素が、それぞれどのように関係しているのかを解き明かしていくことが大切なのだ。



●渡邊直実（わたなべ・なおみ）



●勝山幸子（かつやま・さちこ）

座談会に思うこと

長谷川 祐子

[横浜市立西金沢中学校長]



新学習指導要領の実施に向けて、先生がたから実践に基づく指導観、音楽観などが熱く語られ、たいへん中身の濃い充実した話し合いになりました。進行役である私のほうがすっかり引き込まれてしまい、お役に立てなかったことを反省するとともに、このような有意義な場に参加させていただいたことに心から感謝しております。

今回の企画のすばらしいところは、小・中の先生がたが同じ土俵において、義務教育9年間のスパンで子どもをとらえ、実践に引きつけて互いに意見交換をし合いながら新学習指導要領への理解を一層深め、発信することができたことだと思います。新学習指導要領は小・中のつながりを視野に入れ、指導事項を歌唱、器楽、音楽づくり（創作）、鑑賞の活動分野ごとにまとめて

示すとともに、子どもが広がりや深まりのある音楽活動を創っていただけるように〔共通事項〕をくくって示しました。これによって、音楽活動を通して子どもたちには何を聴き取って、感じ取ってほしいのかが一層明確になり、教師にとってもわかりやすく、指導しやすいものになったと思います。

限られた授業時数の中ですが、まず教師自身がしっかりと教材研究をして、音楽の面白さやよさ、美しさを自らとらえるとともに、指導のねらいをしっかりと一時間一時間の授業に臨むことが大切だと思います。そして教師も一緒に音楽を楽しみながら、子どもたちが心に残る音楽と出会い、友達と音楽をつくり上げる喜びや感動を味わうことができるような授業づくりにチャレンジしていきましょう。

グローバルな感覚で音楽科教育を！

原田 徹

[墨田区立錦糸中学校長]



座談会での話し合いを思い出しつつ、あらためて新学習指導要領の特徴を整理してみると、3つのポイントがあげられると思います。

まず1つ目は、〔共通事項〕が新設されたことです。——速度、強弱、音楽の縦と横の関係といった〈音楽を形づくっている要素〉を理解した上で、音楽の特質や雰囲気を感じ取る——そんな力を子どもたちが身に付けていけるように、いくつかの音楽にかかわる用語や記号が明確に示されました。

2つ目は、子どもの「思いや意図」をいかに教師が引き出すか、ということです。ここからは「一人一人の子どもを育てる」「集団の中でコミュニケーションを図りながら」といった2つの課題が浮かび上がってきます。またその「思いや意図」を子どもたちが音

や音楽を通して表現するだけでなく、言葉を大切に表現することも目指しているのが大きな特徴であると言えるでしょう。

3つ目は、小学校から中学校、高等学校まで一貫性のある音楽科の指導を目指して学習指導要領が作成されたことです。これは画期的ですばらしいことだと思います。

教育界全体では「思考」「判断」「表現」を大事にすることがテーマとされてきました。困難な課題に直面しても解決していけるような人間を育てる、というねらいです。

そんな状況の中で、音楽科ができることはたくさんあるのではないのでしょうか。グローバルな視点、感性、情熱をもって、音楽科教育を実践していきましょう。

オン&オフ ミーティングを聞いて

小原光一

[元横浜国立大学教授]



平成20年3月に新しい「学習指導要領」が告示されてから、早くも1年が経過しようとしています。時の流れの速さを改めて感じる昨今です。

この間、新学習指導要領の示す目標、内容等の趣旨についての正しい理解を図るため、昨年8月に小学校、9月には中学校の「学習指導要領解説・音楽編」が文部科学省から出版されたのは周知のとおりであります。また、出版各社によるガイドブックに類する手引書の刊行や、諸種の雑誌紙面に組まれた特集も数多くあり、全国の各地において新学習指導要領にかかわる研究や勉強会が盛んに行われた1年でありました。

さてこれから先、各学校では新学習指導要領の内容の趣旨に即した新しい教育課程を編成することになり、それに基づく教育が全面実施となる平成23年度（小学校）、24年度（中学校）に向けて諸準備が進められていきます。当面、平成21年度からはそのための正規の移行期間に入ることとなりますので、どの学校も昨年度中に行った新学習指導要領に関する研究を深めたり、

部分的には新たな試行も加えたりすることによって得た成果を生かしながら、試行の枠を更に一步広げる形での具体的な実践が積み重ねられていく年になるものと思われます。

そのような時に当たり『音楽教育ヴァン』は、絶妙なタイミングで〈新学習指導要領のポイント総ざらい〉という意味での座談会を企画されました。新しいことを始めるに際しては、慎重に原点に立ち返りつつ進めていくことが大事であるからです。傍聴させていただいて感じたことを少々述べてみます。

小・中学校から合わせて14名という大勢による座談会でしたが、豊かな指導経験をお持ちの先生がたの集まりであっただけに、終始活気に満ちた雰囲気の中で、音楽科教育の現状を踏まえ、これからの展望に繋げるための自身の濃い話のやり取りがされており、流石の感が一入でした。進行役の長谷川祐子先生、原田徹先生の見事なリードぶりも、強く印象に残りました。

話し合いは、中心を〈歌唱〉〈器楽〉〈音楽づくり・創作〉〈鑑賞〉〈日本の伝統音楽〉〈共通事項〉の6ポイントに置いて進められていきましたが、どのセクションにおいても現状とそれに伴う課題が抉り出されたので、新教育課程をより望ましい形でスタートするためには、これからの移行期間での指導を通じて、このようなことについて、

このような対処をしておくといつたような多くの示唆を含んだ貴重な事柄が話し合いの結果として残ることになり、大変すばらしいことであつたと思っています。

この座談会にオブザーバーとして同席させていただき、各々がたの新学習指導要領の読み取りの深さに触れて感銘を受けました。また、発言の内容には共感を覚えるものが多々あったので、私自身、改めて多くのことを再確認するよい機会ともなりました。

音楽をする喜びを味わうためには、学力としての「音楽力」をしっかりと身に付けること。スパイラルな形で広がりつつ高まっていく連続性、発展性のある「指導計画」を作成し、小・中の関連を重視すること。感覚的な享受のみに止まるのではなく「思いや意図」に裏打ちされた音楽活動の実現を目指すこと。「まずはやってみる」「とにかく触れてみる」からはじまる〈日本の伝統音楽〉へのアプローチ。指導するのではなく、指導に生かす〈共通事項〉等々、地道な言葉が飛び交っていたことも併せ、心強さのようなものを感じながら耳を傾けていました。

今回お集まりの先生がたには、これからもそれぞれの地域でのリーダーとして一層の活躍をされますことに大きな期待を寄せつつ、音楽科教育のますますの充実、発展を祈っていたと思っています。

授業者に訊く ①

眉山の麓に位置する歴史ある学校、佐古小学校を訪ねました。
 4年生がグループに分かれて初めて二部合唱を学習します。
 聴くことを大切にしながら、子どもたちの表現をはぐくんでいく——
 地域や学校全体とのかかわりを通して表現者としての子どもが育っています。

授業者：富田 操

徳島市佐古小学校

本時の授業の位置付け

題材は「音を聴き合って合わせよう」です。

前時では『おどろう楽しいポーレチケ』の二部合唱を階名で歌いました。その中で次回はグループに分かれて学習することを伝え、グループ学習の進め方を確認させました。

本時では、他のパートを聴きながら3拍子のリズムに乗って部分2部合唱を楽しむことをねらいとしています。

次時では、「歌詞による歌い方を工夫する」ことについて学習する予定です。

授業の流れ

	学習活動	指導(・)と評価(☆)
導入	1. 既習曲を歌う。 ・音楽係が中心になって ・今月の歌 ・集会で発表する曲	・楽しく学習できるような雰囲気づくりをする。
展開	2. めあてを確かめる。 3. 部分二部合唱をする。 ・聴き合って ・曲の感じ ・声の出し方を工夫 ・3拍子のリズムに乗って ・バランスの工夫 ・曲のヤマの表現 ・グループで話し合って ・協力して	・グループで二部合唱することを確かめさせる。 ・他のパートを聴きながら歌えるように助言する。 ・パートのバランスを工夫し、美しい響きの合唱ができるよう支援する。 ・必要であれば児童のそばで一緒に歌ってやることで、自信をもって歌えるような支援をする。 ☆他のパートを聴きながら、楽しく二部合唱しているか。
まとめ	4. グループごとに聴き合い、次時への意欲付けをする。	・友達の表現のよいところを見つけるように助言する。 ・歌詞による歌い方の工夫をすることを知らせる。

「聴く・聞く」ことから育つ子どもの音楽表現

聞き手
兼平佳枝
(北海道教育大学附属札幌中学校)

日常の態度が大切

兼平：今日の4年生、すごくよく歌っていましたね。

富田：1年生から6年生まで、本当によく歌う子どもたちです。歌うのが好きなんですね。

兼平：先生は、低学年から受けもたれているのですか？

富田：いいえ、2年生の一クラスと4年生以上です。空き時間を使って、授業を受けもっていない低学年のクラスに行き、「今月の歌」などの指導をすることはありますね。ちょっと種をまくと、そのあと担任の先生がフォローして子どもに身に付けてくださっているような状態です。

兼平：富田先生のご指導、子どもたちに対してとても優しい印象を強く持ちました。

富田：いえいえ、やる気がない子や、集中できない子に対しては鬼のように怒りますよ。私が廊下を歩いていると、走っていた子どもがピタッと立ち止まるぐらいです（笑）。でも音楽的なことでは怒らないですね。音楽的な部分は私の指導に問題があるのだと思いますから。

兼平：合唱部の指導でも基本的には同じでしょうか？

富田：音楽的なことはもちろんですが、日常生活の中で、挨拶がきちんとでき



るとか、パッと気がついてお手伝いができたり、靴を揃えることができたり…、そんな当たり前のことについてもつい目がいってしまいますね。合唱部の子どもたちはボランティアの掃除活動にも積極的に参加しています。

兼平：そうした日常の指導の積み重ねなんですね。今日の授業でも、先生がピアノで『アマリリス』を弾くことで授業の場面転換がわかり、それがきちんとルールとして子どもたちに浸透していて、とてもすばらしいと思いました。子どもが次の行動に移る際に、無駄がありませんね。

富田：小学校ではよく使うテクニックです。本校のチャイムの音楽『アマリリス』を弾くと1年生でもサッと席に

着いたりするんですよ。

兼平：子どもたち同士で互いの発表を聞き合うとか、意見を言うなどの場面で、子どもがきちんとした姿勢もっていました。

富田：互いの意見をしっかりと聞き合うことができるあたりは、学級経営によるものも大きいと思います。

兼平：自分の意見や感想を発表するとき、「聞いてください」と言って、どんだんあとは子どもたちが自発的に発言していくんですね。

富田：あれは年度当初に指導しました。一人ずつ名前を呼んで当てていくのも大切なのですが、より積極的に子どもたちにかかわってもらいたいし、時間ももったいないですから。



●かねひら・よしえ
北海道教育大学附属札幌中学校教諭

基礎・基本の積み重ね

兼平：授業導入のときのソルフェージュ、新学習指導要領で言えば「共通事項」の一つにあたるものですが、いつもされているのですか？

富田：そうですね、その日の音楽係がリズムと読譜の課題を出すようにして。実は、「階名裏技読み」と称して、「みそしる」と教えてあるんです。ミソシから始まる音です。階名を読みましようと言うと、どうしても下からドレミファと数えるんですが、それだと高いほうに行くのに大変なんです。階名の書き込みは一段に2つか3つまでとさせて、覚えたら消そうねと言います。今まで全部書いていた子どもたちからは「ええ～」と言われますが、早く読

む練習のための「ミソシル」から始まる節にしてあるんです。

兼平：リコーダーも上手でしたね。技巧的に難しいようなサミングなど、みんなうまく演奏していました。

富田：4年生では、高いソまでなんですよね。集会の曲ということで、「こんな曲をやりたい」と楽譜を見せられたときは、吹けるかな？と心配しましたが、がんばってくれたようです。授業の始めに少しずつやり、朝の会などで「今月の歌」を歌うときに、リコーダーもやろうねと言って練習させました。

兼平：授業で培った基礎・基本が集会などで一気に伸びるということですね。

富田：佐古小では、音楽集会に限らず、すべての集会、例えば環境集会や保健集会でも最後は歌ってますし、行事にも音楽活動はなくてはならないものとなっているんです。

聴き合って合わせる

兼平：今日の4年生は、初めて本格的な二部合唱に取り組んだわけですね。

富田：グループで取り組むのは初めてですね。教科書の『空に雲に』と『おどろう楽しいポーレチケ』を抱き合わせて指導しています。こちらの曲で高音部を歌った子どもは、もう一方では低音部を歌うという具合です。

兼平：パート練習をしなくて、いきなり合わせましたが…。

富田：1時間目から合唱にしてしまうんです。高音部をまず全員で勉強して、

その次に低音部を全員で勉強して「合わせてみよう、分かれてみよう」という指導ももちろんあるのですが、そんなに時間的余裕はないですし、違う教材で低音部を経験させるという指導を行っています。

兼平：「パート決め」「階名唱」「歌詞唱」「オルガンなしで歌う」「表現を工夫して歌う」「みんなで仕上げる」という段階的な進め方は、この教材に限らず行っているのですか？

富田：5年生、6年生になってもそうです。

兼平：「聴き合って合わせる」というのが本授業のテーマだと思います。この教材を通じて自分の音や友達の音、伴奏を聴くなどを意識させる、ということでしょうか？

富田：自分の声を聴いてとか、友達の音や声を聴いてなどということは、子どもたちはずいぶん経験していると思います。でも「違う節を歌っている友達の声を聴いて」ということはあまりなかったことです。

兼平：輪唱などは？



授業者に訊く

1

富田：ありますね。3年生でも4年生でもパートナーソング的な2声の重なりを学習できる教材はありましたが、高音部、低音部というハーモニーは初めての経験です。

兼平：今日、子どもたちは『おどろう楽しいポーレチケ』をアカペラで歌っていました。音程が下がってきたりして難しいですよ。

富田：子どもたちがああしよう、こうしようと言っている間は、できるだけ音がない状態にしています。その方が、音を聴き合うことに集中できると思います。

兼平：一方のグループの方は頭声的な発声の子が多くて、音程もしっかりしていたように感じられましたが…。

富田：合唱部の児童が何人かいるんですよ。

兼平：中学生もそうですが、地声だと下がってきてしまいがちです。でも、一度も「下がっている」という指摘はありませんでした。

富田：今日は言いませんでした。私が下がり気味の子どものそばで歌ってやったり、友達の声の聴いたりして気づかせたいですね。みんなで歌うことによって気づくので、今日も、音程が下がり気味だったグループの子どもたちが影響を受けて、だんだんいい声で歌うようになってきました。

歌声づくりは低学年から

兼平：『おどろう楽しいポーレチケ』に入る前の既習曲を歌ったときから、

子どもの体の動きがありましたが、自然に身についたことなののでしょうか？

富田：実は低学年のときから、「歌うときに、音楽に合うように自然と体が動いたらカッコいいね」と言っているのです。どんな曲でも動いているようです。全員一致での動きではありませんが。

兼平：拍をとるなどの自然な動きが基本となるのでしょうか？高学年になっても動きがありますか？

富田：低学年では跳んだりねたりしていますが、それはそれでいいと思っています。高学年になってくると明らかに変わってきますね。

兼平：子どもたちにとって体を動かしたほうが歌いやすいのかもしれないですね。意外とじっとしているほうが歌いにくいとか…。

富田：硬直するのもかもしれませんね。少し動きがあると楽しくなり、発声も楽なのかもしれません。

兼平：発声にしても頭声の発声もしっかりと身に付いている印象を受けました。

富田：低学年を飛び込みで指導する際、地声でどなったりすると「6年生みたいな声がいいんだけどなあ」などと言うととても効果があります。パッと変わるんです。子どもたちには毎朝、合唱部が練習する声が聞こえていますし、いろんな集会で歌っていますから。

兼平：日常の中で、低学年の子どもが上級生の歌声に触れる機会が多くあるのです。子どもにとってそういうモ



●とみた・みさお
徳島市佐古小学校教諭

デルがあることは強いですね。

富田：「声が出る」ということにおいては、地声で大きな声でどなる、というのもひとつのあり方かもしれませんが、低学年から「歌う声」はつくっていかないといけない、と思っています。歌唱指導は一般的に3、4年生のときがポイントとされていますが、低学年から意識をもたせた声作りをしていきたいと思っています。

兼平：授業のはじめの『Tomorrow』など、とてもきれいでした。中学生のレパートリーとしても人気のある曲です。

富田：「今月の歌」の中では、1年生でも『さんぽ』や『ミッキーマウスマーチ』より『Tomorrow』が人気があるんです。

曲の「おいしい」 ところから教える

兼平：今日は全員が歌うときはすべて先生が伴奏を弾いてらっしゃいましたが、グループ練習や低学年の授業はどうされていますか？

富田：グループ練習では子どもたちがオルガンでメロディーだけを弾くとか、低学年の担任にはCDを配ってあります。高学年になると弾ける子が弾いてくれますね。

兼平：参観させていただいた印象として、先生の音楽作りはいい意味でとてもシンプルだなあと感じたんです。この曲だったらポイントはここ、のように、子どもたちをうまく集中させているというか…。何か指導を工夫されているのですか？

富田：新しい曲を教えるときに、いちばんいいところから教える、ということでしょうか。

兼平：子どもが先に覚えたフレーズとか、気に入ったところ、ということですか？

富田：曲によっては、最初に自分が範唱して一番印象に残った言葉やフレーズを聞いてやることもあります。たいていは、こちらがいいなと感じた部分です。教師主導と批判されるかもしれませんが。

兼平：いや、大事なことですよ！教材研究を徹底的にやらなければできないことです。先生のそうしたフレーズの選択や指導の仕方は、子どもたち



がいろいろな曲に出会っていったとき、自分なりの表現の工夫へのヒントになるのかもしれませんが。

富田：もちろんどの部分もきちんとできないといけないのですが、「こいいな」という部分を先にやってしまうと、子どもの集中力や声そのフレーズに集中して、曲全体の表現という点でもいい効果があるのかもしれませんが。

兼平：それが発声練習にもつながっている…？

富田：そのときもありますね。私は、日常の授業では発声だけを取り出してはやらないんです。楽曲の中のフレーズを使って声作りはじゅうぶんできますので。

音楽的なボキャブラリーを増やす

兼平：「歌うこと・表現すること」を柱に子どものさまざまな音楽的な力を育てている、ということに授業から強く感じました。「表現をする」という意識を育てながら、それをしっかりと聴いて受け止めていらっしゃる姿が印象的でしたし、その意味では「聴くこと・聞くこと」をととても大切にしてい

る実践でした。子どもたちも「もう少し～の部分は工夫した方がいいと思う」などのように、ただほめるだけにとどまらない発言がありました。

富田：「できるだけいいところを見つけようね」というのが口癖です。でも「こういうところを直してみるともっとよくなるよ」という意見を言うことも大切だよ、ということも子どもには伝えています。「力が少ないと悪いところばかり見えてくるよ。ちょっと力が付いてくると、いいところも見えるよ」とも言うんです。

兼平：表現の工夫のところ「バランスの工夫」などいくつかのポイントを提示されていましたが、結局あそこに意識を置くことによって、子どもたちの歌声やハーモニーが育っていくでしょうね。

富田：そうだと思います。

兼平：言葉を使って意識づけをしていくということが重要だと、あらためて感じました。

富田：言葉については、音楽で使うような言葉を子どもたちはほとんど知らない、ということを感じています。音楽的な言葉を教えないと、小学生の子どもたちは、「今の声が高かったです」と言う子どもは、それが「強弱」の「強い」という意味と混乱してしまっている場合があります。

兼平：それは中学生を指導していても感じることで。彼らの音楽的なボキャブラリーが増えるよう、こちらもしっかりと教えていきたいと思っています。本日は本当にありがとうございました。

授業者に訊く ②

中学校は秋田県南部の横手市を訪ねました。
2年生がオペラ『カルメン』を鑑賞する実践です。
音楽と出会い、自分の言葉で仲間に伝える——
そんな響き合い高め合う生徒たちが育っています。

授業者：谷口桃子

横手市立横手南中学校

本時の授業の位置付け

3年間かけて感性豊かな、そして表現力豊かな生徒を育てていきたい願いから、〈総合芸術〉の音楽学習を各学年で系統的・計画的に設けています。

今回は《オペラを楽しもう》の音楽学習で、4時間の学習計画を立てています。

オペラ『カルメン』の主な登場人物が歌うアリアに着目し、その役柄や性格から「どんな音楽で表現されるのか」予想を立て、実際に聴いて「どんな感じの音楽だったのか」を話し、さらに「なぜそう感じたのか」を自分の言葉で語るプロセスを経て、最後はその音楽表現のよさや聴かせどころを友達に紹介する文(批評文)にまとめる、という音楽学習です。

授業の流れ

学習内容(○)学習活動(・)

- 音楽学習の雰囲気を高める。
 - ・クラスレパートリーのなかから「本日の歌」を合唱する。
 - ・「フィーリングハート」の音楽活動を行う。
- 学習課題を把握する。
 - ・「今日のゴール」「よくばりゴール」を確認する。
- 音楽表現について 聴く・考える
 - ・『カルメン』の主な登場人物を確認し、その役柄や性格から「どんな音楽で表現されるのか」を予想し発表する。
 - ・登場人物が歌うアリアを聴き、実際は「どんな感じの音楽だったのか」を話し合う。
 - ・さらに「なぜそう感じたのか」を音楽の諸要素から考えて話し合う。
- 音楽表現について 観る・味わう。
 - ・登場人物が歌うアリアを視聴する。

主な指導上の留意点

- ・音や音楽に対峙し、自分の考えをもつ場(自己決定をする場)を保障する。
- ・課題(ゴール)を明確にとらえることができるように、板書と合わせて課題の示し方を工夫する。
- ・音楽への解釈や考えが膨らむように、短い場面に絞って「じっくりと聴く活動」を設定する。
- ・音楽の感じ取りが深まるように、効果的に「繰り返し聴く活動」を設定する。
- ・音楽の感じ取りが人それぞれに多様なことに気付くよう、全員がみんなの前で感じ取ったことを表現する場(自己発信をする場)を保障する。
- ・生徒が音楽への気付きや感じ取りをスムーズに言語化していくことができるように、声かけや発問の切り返しを工夫していく。
- ・音楽の感じ取りを深めるために、自分の思いや考えを発信し合ったり、互いにそれを聞き合ったりして検討したり、共感し合ったりする場(自己と他者が寄り添い合う場)を保障する。
- ・音楽的な特徴に着目しやすくするために、音楽用語や音楽的語彙を示したカードを活用する。また、感じ取らせたい諸要素を絞り込んで提示する。

出会いと響き合い

聞き手
松澤和美
(茅野市立玉川小学校教諭)

フィーリングハート

松澤：既習曲『輝くために』の合唱から授業がスタートし、「フィーリングハート」という活動がありました。音楽を聴いたあと、生徒にその曲のイメージを色にたとえさせるという…。とてもすばらしい試みですね。

谷口：聴いた音をいきなり言葉で表現すると言っても難しいと思うんです。30秒だけ音楽を聴いて、それをまず色にたとえてみるというところからスタートさせているんです。

松澤：フィーリングハート…、ユニークなネーミングですね。

谷口：名前の通り、音楽に向かったときに心が揺さぶられるような時間を設けたいということで始めたことなのです。ウォーミングアップということで、色だけぼんぼんぼん、と答えてもらったり、「同じような色を答えた人」って手を挙げさせたりすることもあるんですけど、基本的にはまず全員を音に対峙させたくて始めた取り組みです。

松澤：指導計画を見せていただくと、3年生までいくつかの題材の中で系統立てて行っているんですが、今日のフィーリングハートの選曲は天気と関係しているのですか？

谷口：明るい空をイメージさせるような曲もよく使いますが、今日は雨も降っていて寂しそうなので、ジョージ・



ウィンストンのピアノ曲にしました。あまり手の込んだ楽器のものは選ばず、シンプルなピアノの曲や、弦楽合奏のように同質の楽器で演奏されている曲を選んで、子どもたちにウォーミングアップの段階からあまり難しい課題を与えないようにしています。

松澤：とてもよく語っていましたね。「高い音と低い音が飛びはねている感じ」とか、「知らないところに迷い込んだ感じ」とか、学習の積み重ねだなあ、と感じました。そんな積み重ねが鑑賞の「自分なりに根拠を持って批評する」というところに向いていくのでしょうか。

今日は音楽的要素で、ということで速度やリズムなど、いくつかカードが

出てきましたが、これは鑑賞の授業のために用意されたのですか？

谷口：実は音符博士が好きでいつも音楽室にカードを貼っているんです(笑)。レベル1から5というカードは、合唱のときに使いました。最初は音程に気をつけてみようとか、レベル2になったらハーモニーに気をつけようとか、レベル5に上がっていくと表現の工夫になるように、とか…。鑑賞だけではなく、いろいろな音楽活動で使っています。

教材としての『カルメン』の魅力

松澤：今日はオペラ鑑賞ということ

で、『カルメン』を教材に、主人公カルメンとエスカミーリョに焦点化して、しかもヴィジュアルなものにとらわれずにCDで聴かせてもらっていました。エスカミーリョの声について先生が「どう?どんな感じ?」って聞かれたときに、「No.1の自信に満ちてる感じ」といった女子からの発言がありました。子どもたちが自分で価値を見出して意欲的に発言しているところがすごいな、と思ったんです。

谷口：『カルメン』という作品は結末が残酷なのでタブー視されることもあると思いますが、キャラクターを表す音楽としてすごくいいものがあると感じて教材にしています。音楽的な諸要素も比較的わかりやすいし、子どもたちがとらえやすいのではないのでしょうか。今日はとにかくカルメンの歌う「ハバネラ」という曲のもつキャラクターがメインでした。またある年は、カルメンとエスカミーリョではなく、ドン

・ホセとエスカミーリョを取り上げたら、見事にあの2人の性格の違いやタイプの違いを音楽で読み取ってくれました。

松澤：私は小学生を教えていますから、子どもたちの語彙が豊富なのに驚きました(笑)。「悪魔的」とか、男子が「男を魅了しまくって“善”ではない感じ」とか。

谷口：言っていましたね(笑)。

松澤：授業の最後にアグネス・バルツァが歌っている映像を見ると、子どもたちは黙ってしまいましたね…。

谷口：舞台全体の様子を感じる段階では、映像ではあまり主人公が目立たない場面を見せていたんです。闘牛場の前の賑わいとか、最初の工場の前での人々の姿などを見せて、「すごい、オペラってこんな3階建ての建物も造っちゃうんだ」と全体的なところから入っていきました。歌っている様子も見せてから音を聴くということはやっていませんでしたので、もしかするとあの子たちは、もっとすごい美女というか(笑)、若い艶やかで美しい人を思い描いていたのかもしれませんが(笑)。

松澤：子どもたちは心の中で「おお!」って思ったものがきっとあったのだと思います。あのとときの沈黙がとても大事だったのではないのでしょうか。あの沈黙は、今日のクライマックスだったのではないかな

…、という印象をもちました。

谷口：そうですね。そうすると、耳だけで聴いた音楽が、次はいよいよ映像を伴って、目の前で丸ごと観られるという期待感で帰ったでしょうね、確かに(笑)。

松澤：カルメンって、設定は意外と若いんですね。だけどバルツァは堂々としていて、声も太め。そのギャップがまたオペラのおもしろさだったりしますよね。聴覚的なイメージから視覚が伴って、本当のオペラへのステップを子どもたちが上がったところでちょうど終わった今日の授業は、とてもすばらしかったです。

谷口：過去の生徒の例では、最初に「ハバネラ」を歌っているカルメンを見たときにはやはり想像していたものとの違いを感じるようですが、映像を観ていくうちにあのカルメンに惹かれていくんです…。バルツァの力もあると思います。それにカルメンも舞台の中でだんだん変わっていきますよね。それがあの子たちにはすごく新鮮に映るようです。この次、その次あたりでそういうところに辿り着かせたいな、と思います。

鑑賞活動と言葉の力

松澤：今、子どもたちの環境はいろいろな音に取り巻かれていて、中学生ぐらいになれば自分でインターネットやオーディオをチョイスする時代に、あえて先生は音にこだわってCDで聴かせたり、自分の感性を育てるためにフィ





●たにぐち・ももこ
秋田県横手市立横手南中学校教諭

ーリングハートのような活動をなさったりしていますね。何でもすぐヴィジュアルを頼るのではなくて耳から、というところが先生のお考えなのでしょうか。

谷口：そうですね。最終ゴールはステージ丸ごと、ステージから放つエネルギー全体を味わってほしいと思います。限られた音楽の授業の中では最初から最後まで通すなどということは厳しいのですけれど…。でもやはり音や音楽に向かい合わせるときには、余計なものを削いで、まず音を正面から受け止めるところを保障してあげたいな、というのが根底にあります。

松澤：少し意地悪な質問なのですが、感想文が書ければいい、あるいは、頭のいい子だとハーモニーとかリズムな

ど、音楽的な諸要素の用語をちょっと使って感想文を書いて「はい、いい点」のような評価が得られる危険性についてはどうでしょうか。さらには、例えばある要素だけを聴き取ればいい、ということになってしまうとか、あるいは音楽が鳴っている時間はすごく短くて、ほとんど話し合いということにならないでしょうか。今日のように、全員にはほぼ均等に音楽を語る力が育っているクラスなら別ですけれど、特定の子たちしかしゃべれなければ、たぶんそこにイメージが固定されてしまうと思うのです。

谷口：ここ2、3年、たまたま言語活動をどのように音楽科の授業に持ち込むか、について研究する指定をいただきました。

私はゼロから積み重ねようとしてきて、最終的には批評文が書ける子や、今日のようにかなりのレベルまでとなりと行ける子も出てきているのが事実です。「これだけ発言できるようになるまで、ずっとこればかりやっているのでいいですか?」と言われたこともあります(笑)。音や音楽があふれていなければ音楽科の授業ではないと思いますし、音や音楽に囲まれて初めて成立するのがこの部屋、音楽室です。たとえば歌唱活動でも、ちょっと立ち止まって、「この表現どうする?」などと話し、次は「歌いながら確かめようよ」という活動を根底でやっていかねばいけません。

生徒の批評文を見せて、「最後はこ



こまでたどり着かせたい」と言うと、そのゴールばかりを見て、「これは一部の限られた子だけでしょう」という意見もよくいただきます。

松澤：どういうふうに積み上げていこうか、先生方も知りたいところだと思います…。

谷口：今日は4つの諸要素が子どもたちから出てきたのですが、最初からこちらが「さあ、これについて語れ」というものでもないですし、自由な音楽の感じ取りが保障された上で、「音楽がそれだけあなたの心を揺さぶったからには、何か理由はありそうだよ」というところから入っていくべきだと思います。そして次の段階からは「リズムに注目してみようか。音符博士みたいに」というように。

コミュニケーションと積み重ね

松澤：しっかりと自分の言葉で話している生徒さんがとても多いな、と思いました。日頃の積み重ねの賜物なんで

しょうか。

谷口：この子たちが入学して間もないときは、このようには音楽を語れなかったと思います。1年生の早い時期は、「フィーリングハート」もあまり欲張らずに、「色」や「形」や「どんな感じ？」だけで終わるときもありました。「こんな感じ」と表現するだけでも生徒にとっては大変なことではないでしょうか。音楽に対しての思いや「自分だったらこう思う」ということをまず保障して、だんだんに「じゃあ、それはどこから来てるの」とか「どうしてそう思ったんだろうね」と、さまざまな題材の中で実践していきました。それで2年生の後半に差しかかって、なんとかここまで来られるようになったかな、と思います。

ただ、音に集中させるとか、音に向かい合わせるのが、特に今の子ども

はうまくいかないこともあります。フィーリングハートであれば30秒なのですが、たった30秒でも、「ここはきちんと音楽と向かい合おうね」とか「音に注目」と言いながら、音と対峙させる場を少しずつ積み重ねてきました。

松澤：今の「対峙」という言葉は、見せていただいた指導案にも、音楽科全体で先生が目指されているものにも出てきました。それがやはり先生の願う姿なのですね。先生は子どもたちと向き合って、キャッチボールをして、うまく子どもたちの言葉を受け止めてあげている。受け止めてくださる先生の存在があるから、子どもたちがとても活発に心の中を話してくれているのだな、すてきだな、と思いました。

谷口：小さなことですが、必ず生徒を名字ではなく名前で呼んで、できるだけ一人一人とかがかわれるよう発問や言葉かけを工夫しています。

松澤：小学校現場の立場からお聞きしますが、中学校から見て小学校の音楽ではこれだけはやってほしいことを教えていただけますか。

谷口：そうですね。小学生のうちにできるだけたくさん音や音楽に触れたり、音楽を表現



●まつざわ・かずみ
長野県茅野市立玉川小学校教諭

したりする場面をもってほしいですね。そうすれば子どもは、理屈抜きに「音楽室は楽しいな」とか「音楽室に行くといいことがあるな」と感じてくれると思うんです。小学校時代は、音や音楽に囲まれて過ごす嬉しさが基盤なのかと。それを土台に中学では、言語的な掘り下げもできますし、音楽を感じ取る深みや広がりをもたせる授業を展開できますから。

松澤：どれだけの音や音楽とよい出会いをしているかが大切なんですね。

谷口：「出会いと響き合い」。この言葉にすごくこだわりをもっているんです。

音も音楽も人も、「出会い」そして「響き合い」生まれるような、そんな音楽授業がたくさんできたらいいなと思っています。



研究大会をつなぐ

—平成20年度音楽教育研究大会と次回大会をリレーする—

平成20年10月から11月に行われた以下の音楽教育研究大会から、研究授業の題材名などをご紹介します。また、「大会報告」と「次期大会への抱負」を、今期大会と次期大会それぞれの事務局長の先生方から寄せていただきました。

*紙幅の都合により、各大会の内容から研究（公開）授業の題材名、学年、授業者のみを掲載いたします。また文字使いは各大会誌に掲載されたものを基本的に使用しています。

[大会名一覧]

- ◇第50回 北海道音楽教育研究大会 旭川大会
- ◇第50回 関東音楽教育研究大会 埼玉大会
- ◇第56回 東北音楽教育研究大会 大崎大会
- ◇第44回 宮城県音楽教育研究大会
- ◇全日本音楽教育研究会高等学校部会 全国大会
- ◇第50回 近畿音楽教育研究大会 奈良大会
- ◇全日本音楽教育研究会小・中学校部会 全国大会 本部大会
- ◇第49回 九州音楽教育研究大会 鹿児島大会
- ◇第46回 鹿児島県音楽教育研究大会
- ◇第39回 中国四国音楽教育研究大会 香川大会

平成20年度 第50回 北海道音楽教育研究大会 旭川大会

平成20年10月9日(木)・10日(金) 旭川市民文化会館 他

大会主題：つながる ひろがる ひびきあう ～ともにいこう 感動をよぶ音楽探しのたびへ～

■研究（公開）授業

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	2年	どんなようすかな 鑑賞、器楽演奏（鍵盤ハーモニカ）『汽車は走る』	旭川市立忠和小学校 吉岡音井
	2年	すてきな音をみつけたのしもう 創作、器楽演奏（打楽器）『森のたんけんたい』	上富良野町立上富良野小学校 小山和歌子
	4年	様子を思い浮かべて 歌唱『風の招待状』	北海道教育大学附属旭川小学校 米津洋伸
	6年	音楽で描こう 創作『海の音楽』	旭川市立朝日小学校 米津郁子
中学校	1年	表現の特徴をとらえて 日本の民謡に親しもう 鑑賞、歌唱『ソーラン節』	旭川市立北門中学校 片倉裕美
	2年	箏の特徴を生かして創作表現をしよう 箏による創作曲	旭川市立神楽中学校 渡辺 舞
	2年	ア・カペラでの表現を通して 響き合うよるこびを味わおう 歌唱『大きな古時計』他	旭川市立東明中学校 児玉かおり
高等学校	1年	リコーダーで響き合う 器楽演奏（リコーダー）『カノン』	旭川北高等学校 柴田貴志

旭川大会を振り返って

旭川市立忠和小学校長
金澤澄和

旭川大会主題は「つながる ひろがる ひびきあう」～ともにいこう 感動をよぶ音楽探しのたびへ～と設定した。「つながる」とは、人とのつながり。「ひろがる」とは、音楽活動の広がり。「ひびきあう」とは、感動を分かち合う姿。これらの姿を、授業と研究・記念演奏を通して具現化したいと考えた。

授業づくりのポイントは、音楽を愛好し、仲間とともに楽しみながら意欲的に音楽活動に取り組む児童生徒の姿を求めること、共通事項を的確に押さえた指導を行うこと、指導と評価の一体化を図ること、などであった。



旭川市立北門中学校1年生の研究授業より

研究推進にあたっては、講師を招聘してこれからの音楽科の方向性と授業の在り方について大いに学んだり、授業づくりの検証のためにかなりの数の研究授業を実施したりした。その甲斐あって、大会当日は、各授業とも高い評価を得た。

記念演奏は、マンドリン・三味線・バイオリン・合唱・吹奏楽などの多彩な音楽と、学校や校種を越えた多様な編制を駆使して、つながり・ひろがり・ひびきあう音楽表現を追求した。これからの音楽科の方向性について、授業とともに、この記念演奏を通しても提示することができたのではないかと考えている。

岩見沢大会に向けて

夕張郡由仁中学校教頭
内瀬昭仁

平成21年度は、空知管内岩見沢市にて9月18日（金）に開催します。全体会場、授業公開会場とも岩見沢市市民会館・文化センターとしました。全道共通主題「豊かな感性を育み生きる力を培う音楽教育」の下、「わかる楽しさ できるよろこび わかちあう感動」を主題とし、「響感」をはぐくむ音楽学習を創造していきたいと考えています。

今回の大会日程では、全体会を午前中に、授業公開は午後を設定しました。授業公開会場も、学校ではなく、一か

所に集め、各授業や分科会を行き来できるようにしました。これは、各学校の授業時数確保のため、影響を最小限にとどめるための工夫と同時に、小中の連続性の視点から、相互の参観を可能にした、大胆な発想の転換ともいえるものです。

全体会は、音楽教育に関する講演を予定しています。授業研究は、空知の伝統である、仲間が集って様々なアイデアを出し合い、目標とする授業作りを通して、教師も子どもも、音楽の原点である感動を大切に研究を進めています。

開催まで1年を切りました。管内の音楽教育関係者が力を合わせ準備を加速しています。多くの方々の参加をお待ちしております。

次期大会information

◆平成21年度 第51回 北海道音楽教育研究大会 空知大会(小・中・高等学校)
平成21年9月18日(金)

岩見沢市市民会館・文化センター「まなみーる」他

大会主題: わかる楽しさ できるよろこび わかちあう感動 ~響感をはぐくむ音楽学習の創造~

平成20年度 第50回 関東音楽教育研究会 埼玉大会

平成20年10月24日(金) さいたま市文化センター大ホール 他

大会主題：音楽との新しい出会いを求めて

研究(公開)授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	2年	がっきでよびかけ合いを楽しもう 歌唱、器楽演奏『会えてよかった』	さいたま市立高砂小学校 田中友里
	2年	音楽のやりとりで あそぼうよ 鑑賞、創作『中国の踊り』	さいたま市立辻小学校 森 昭子
	3年	いろいろな音のかさなりを楽しもう 歌唱『あの雲のように』	さいたま市立大戸小学校 川津圭子
	4年	郷土に伝わるわらべうたで遊ぼう リズムあそび『通りゃんせ』	さいたま市立徳力小学校 田矢真理
	5年	ひびき合う音の美しさを 感じながら合奏しよう 歌唱、創作『記念のアルバム』	さいたま市立道祖土小学校 井上佳江
	6年	曲想を感じて表現を豊かにしよう 歌唱『セピア色になっても』	さいたま市立常磐小学校 貝瀬陽子
中学校	1年	和楽器の体験を通して、 日本音楽の音を探求しよう ～「春野祭り」の音風景をつくらう～ 鑑賞、創作『中国の踊り』	さいたま市立春野中学校 渋谷政枝
	2年	エンジョイ・サンバ 創作	さいたま市立本太中学校 森角由希子
	3年	豊かな声は色とりどり 歌唱『ゆきのてら』	さいたま市立土呂中学校 高山裕子

埼玉大会を終えて

埼玉大学教育学部附属小学校教諭
井上雅史

10月24日、埼玉県さいたま市を会場に「第50回関東音楽教育研究会埼玉大会」が開催されました。関東甲信越各地より800名以上のご参加をいただき、小学校6本、中学校3本の公開授業、及び、全体会、研究演奏を予定通り行うことができました。

今年、新しい学習指導要領が告示されました。埼玉大会は現行の学習指導要領の内容で行いますが、その中にも新しい音楽科教育の方向性を示すことが大切だと考え、大会主題を「音楽との新しい出会いを求めて」と設定しました。

研究を進めるため、授業ごとに、さいたま市内、埼玉県内の音楽科教員による少人数のユニットを構成し、それぞれの取り組むべき課題を明確にして、指導案検討、事前授業、協議を重ねてきました。当日は、これまでの研究の全てを込めて、子どもたちと音楽とのすてきな出会いの姿を示すことができたと考えます。

また、研究演奏では、小・中学校の吹奏楽や合唱の演奏に加え、地域の特色を生かした活動として、中学生による小鹿野歌舞伎や小・中合同の演奏など、埼玉らしさを示すこともできました。

今後、さらに研究を深め、子どもたちと音楽とのすてきな出会いを広めていきたいと考えています。



さいたま市立大戸小学校3年生の研究授業より

「だから音楽！
確かな音楽力をめざして」
～かかわろう ひろげよう
つながろう～

小山市立乙女中学校長
森下 尚

栃木大会は、会場を県南交通要衝の地、小山市で平成21年10月16日に開催します。

小山市は、慶長5年（1600年）に天下分け目の関ヶ原の合戦が行われる際に、徳川家康が軍議（小山評定）を開き、徳川260余年の幕開けとなった歴史的な地です。その小山で、関東音楽研究会栃木大会を開催しますことは、少々重荷を背負うこととなりますが、大きなチャンスを頂いたと考え研究を進めて行きたいと考えています。

去る10月3日、7日には文部科学省から高須 一、大熊信彦両教科調査官にいらしていただき親しく御指導いただき、大きな示唆をいただいたところです。

音楽は歌唱にしても器楽にしても、創作にしても、鑑賞でも、仲間と共に音楽をつくりあげたり、意見をかわしたりして多くのことを学び合う教科です。音楽ほど他教科の内容をも包含し



さいたま市立辻小学校2年生の研究授業より

た多くの要素を含んでいる教科はありません。初等中等教育における最重要課題を解き明かし人間形成を図る観点からも意義のある教科です。大会では、音楽を通してみんなで「かかわろう」「ひ

ろげよう」「つながろう」にアクセスし、音楽科の性格が明らかになるよう推進していきたいと願っています。

次期大会information

◆平成21年度 第51回 関東音楽教育研究会 栃木大会(小・中学校)

平成21年10月16日(金)

小山市立文化センター大ホール

大会主題：だから音楽！確かな音楽力をめざして ～かかわろう ひろげよう つながろう～

平成20年度 第56回 東北音楽教育研究大会 大崎大会 第44回 宮城県音楽教育研究大会 大崎大会

平成20年10月31日(金) 中新田パツハホール(加美町中新田文化会館) 他
大会主題：楽しもう 音楽 ～音楽の心を感じ、学び合い、そして豊かな表現へ～

研究（公開）授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	2年	いい音を見つけてあそぼう 表現 『きらきらぼし』などを用いた、いい音づくり	大崎市立古川第二小学校 永山詠子
	2年	リズムにのってあそぼう 表現 おはやしのリズムを参考にしたリズムづくり	加美町立東小野田小学校 櫻井優子、森 邦宏
	4年	音をきき合って合わせよう 表現 『バレードホッポー』	美里町立不動堂小学校 松ヶ根久美子
	6年	曲想を感じ取ろう 鑑賞 『木星』	大崎市立川渡小学校 佐々木千恵
中学校	3年	豊かな響きを感じ取ろう 鑑賞 『交響詩「海」第1曲：「海の夜明けより真昼まで」』	大崎市立古川中学校 小川麻子
	3年	ふるさとの民謡 表現 『斉太郎節』『さんさ時雨』	色麻町立色麻中学校 中條浄恵

大崎大会を終えて

大崎市立三本木小学校教諭
石塚正幸

仙台からやや遠方での開催でしたが、たくさんの参会者にお越しいただきました。開催地加美町はじめ関係諸機関の多大なるご支援や、地域の方々の温かいご協力をいただき、無事終了することができました。

大会主題は、「生活の中でも常に音楽を楽しむことができる子どもを育てていきたい」「子どもたちに音楽の力を着実につけてあげられることができるよう授業改善を図っていきたい」という私たちの願いから生まれたものでした。

音楽の中の確かな学びを実現するために、公開授業を通して提案した具体的な方策は、「育てたい力の焦点化」「学びのプロセスを大切に学習指導の工夫」「指導に生かす評価の工夫」の3点です。文部科学省教科調査官 高須一先生のご指導のもと、小・中学校それぞれの先生方が協同して協議を重ねてきました。

また歓迎演奏と研究演奏では、大崎に息づく豊かな音楽文化の一端を、総勢約400名の出演によりご披露いたしました。故郷大崎への愛、歴史と伝統、そして何よりも音楽の楽しさを共有できる子どもたちのいきいきとした姿、そういうものがお聴きいただいた方々

平成20年度 全日本音楽教育研究会高等学校部会 全国大会 宮城大会

平成20年10月31日(金) 中新田パツハホール(加美町中新田文化会館)
大会主題：楽しもう 音楽 ～音楽の心を感じ、学び合い、そして豊かな表現へ～

研究（公開）授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
	1年	音楽の価値を探ろう 鑑賞 『交響曲第9番 合唱付 二短調 作品125』	宮城県古川高等学校 加賀谷 亮
	1年	わらべ歌を作ろう 表現、創作	宮城県古川黎明高等学校 内藤淳一

の心に伝わっていただければ幸いです。

弘前大会に向けて

弘前市立裾野中学校教頭
西谷龍彦

「ドンコドンコドンコドン…」

津軽の夏の夜空を揺るがす『ねぶた囃子』の荘厳な響き。津軽の地に生まれ育った私たちの体にしみ込んでいる心震える鼓動である。

大会主題を「鼓動 躍動 感動 ～想いを音にのせて～」に設定した。音楽科のもつ特性そのものが、感性を働かせて感じ取る力を高め、思考・判断し意欲をもって表現する力の育成と豊かな心を育む教育が「生きる力」の具現化につながり、音楽の心揺れる体験が感性を育てる。

ここ津軽でのドキドキする「鼓動」、ワクワクする「躍動」、そして生まれる「感動」。授業での音楽の体感が、豊かな感性、情操を育むことにつながっていく。

中央教育審議会の答申および新学習指導要領に基づいて、音楽科教育の担う役割、津軽の四季や風土、音楽文化を礎とした感性や創造性の育成に着目し、心揺れる授業づくりをめざし、本主題を設定した。

また、サブテーマの「想いを音にのせて」は、「自分のイメージを音にして表現し、伝えようとする事」であ



大崎市立古川第二小学校2年生の研究授業より



研究演奏：全体会「合同演奏」より

る。イメージをもつ「感性（心）」と音に表す「技能」、発信し共有する「想い（態度・コミュニケーション）」を、総合的に「確かな学力」として捉え、それを裏付ける「確かな授業」をめざしたいと考えている。

次期大会information

- ◆平成21年度 第57回 東北音楽教育研究大会
第37回 青森県音楽教育研究大会 弘前大会(小・中・高等学校)
- 平成21年10月16日(金)
- 弘前市民会館 他
- 大会主題：鼓動 躍動 感動 ～想いを音にのせて～

平成20年度 第50回 近畿音楽教育研究大会 奈良大会

平成20年10月31日(金) 奈良県文化会館国際ホール 他

大会主題：豊かな体験 響き合う心

研究（公開）授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	1年	わらべうたであそぼう 歌唱、身体表現『おちゃらかほい』他	生駒市立あすか野小学校 山下真美
	4年	世界の音楽～原語の持つ なめらかな響きを大切に歌おう 歌唱『エーデルワイス』	河合町立河合第二小学校 山内亜子
	5年	私たちの響きをつくろう ～真弓太鼓～ 器楽、創作『和太鼓アンサンブル』	生駒市立真弓小学校 荒川真弓
	5年	歌声の偉大なパワーを楽しもう 鑑賞『交響曲第九番 二短調作品125「合唱付き」』	広陵町立真美ヶ丘第一小学校 村田洋子
	6年	声の重なりを感じ、 心をこめて合唱しよう 歌唱『風になれ』	生駒市立桜ヶ丘小学校 奥野智子
中学校	3年	合唱表現へのアプローチ ～おもいをこめて歌おう～ 歌唱『Tomorrow』『時の旅人』	明日香村立聖徳中学校 松井賀洋子
	3年	総合芸術の味わい ～バレエ音楽を通して～ 鑑賞『白鳥の湖』	奈良市田原小中学校 塚本真由美
高等学校	1年	創ってみよう わたしたちの“ふし” 創作『ソーラン節』他	奈良県立奈良北高等学校 大野恭子

奈良大会を終えて

奈良市立三笠中学校教諭
浦恩城利明

平成18年7月21日に第1回実行委員会を開き2年余りの歳月をかけて、今の音楽教育の現状分析と課題を探り、それをもとに研究テーマを設定し研究を深めてきました。また、新指導要領が発表されてから初めての大会でもありましたので、その新指導要領の理念や内容も積極的に取り入れ、今後の方向性を見いだすことのできる発表になることを目指して取り組みました。

大会運営に当たっては、県外からご参加いただく会員の先生方が参加しやすいことを第一に考え、また、私たち音楽教育に関わる者の資質向上のため、「音楽」の魅力を再発見することを目的に、作曲家の池辺晋一郎氏にご講演いただき、その目標を達成することもできました。

研究演奏では、「日本の文化の良さに気づき、和楽器にふれること」「奈良の良さに気づき、演奏を通してその心を育てること」「生徒の創意を引き出し、音楽作りをすること」「校園種間の交流を図ること」を大切に構成しました。最後の「ふるさと」の全体合唱奏は、演奏する生徒たちも、聴く先生方も心地良い一時を過ごしていただいたのではないかと思います。今後、この成果を日々の音楽教育に生かすと



研究演奏：橿原市立畝傍南小学校（鍵盤ハーモニカ合奏）

ともに、6年後の奈良大会に向け深めていきたいと思っています。

なお、この50回大会に併せて、近畿音楽教育研究連合会により、『近畿音楽教育研究大会 50年のあゆみ』を刊行いただき本大会に華を添えていただきました。

京都大会に向けて

京都市立御室小学校長
小宮山修子

今、古都「京都」は紅葉に彩られ、観光客で賑わっております。

本年度盛大に実施されました奈良大会を引継ぎ、平成21年10月30日（金）に、第51回近畿音楽教育研究大会京都大会を京都市を中心に開催いたします。50年という節目からの新しいスタートであり、折しも、学校教育法施行規則の一部改正および学習指導要領の改訂に伴い、音楽教育の一層の充実

が求められています。

京都大会では、新学習指導要領の趣旨を生かした音楽教育の方向性を導いていくことができるよう研究を進めております。大会主題を“心が動く音楽活動の創造”と設定し、音楽を愛好する心情や音楽に対する感性と、音楽活動を成立させるに足る基礎的能力との双方をしっかりと育てていけるよう、日々の授業や指導法の改善に努力しております。

また、平安遷都から脈々と引き継がれてきた古都、京都は伝統と文化の宝庫であり、それらが自然な形で生活の中に生かされています。伝統と文化を生かした音楽活動も取り入れ、生涯にわたって音楽文化に親しむことができるよう実践を進めたいと考えております。

京都大会へのご参加をお待ちしております。

次期大会information

- ◆平成21年度 第51回 近畿音楽教育研究大会 京都大会（幼・小・中・高等学校）
- 平成21年10月30日（金）
- 京都会館第一ホール 他
- 大会主題：心が動く音楽活動の創造

平成20年度 全日本音楽教育研究会 小・中学校部会 全国大会 本部大会

平成20年11月7日(金) 小学校部会：なかの ZERO

中学校部会：国立オリンピック記念青少年総合センター

大会主題：今こそ音楽！ 確かな音楽科教育をめざして

研究（公開）授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	3年	ひとりとみんなの音楽をきこう 鑑賞、歌唱『ホルン協奏曲第一番第一章』 『ひとりぼっちの羊飼』	練馬区立関町小学校 熊倉佐和子
	3年	和楽器のひびきを楽しもう 器楽(箏)『たこたこあがれ』他	中野区立啓明小学校 橋本保代
	4年	ふしの重なりを感じて 歌唱『バレードホッポー』	文京区立駒本小学校 星 悦子
	5年	響き合って 感じ合って 歌唱『さびしいカシの木』	日野市立七生緑小学校 後藤朋子
	5年	和太鼓のパワーを感じよう 鑑賞、器楽(和太鼓)『族』『浮立』『豊年太鼓』	中野区立中野本郷小学校 安藤直子
	5年	BACHの音楽をつくろう 鑑賞、創作『BACHの名による即興的ワルツ』	足立区立梅島第二小学校 村田悦子
	6年	日本の音楽に親しもう 鑑賞『越天楽今様』	江戸川区立葛西小学校 長谷川真澄
中学校	2年	日本の声を考えよう～我が国の 伝統的な歌唱の授業の工夫～ 表現、鑑賞『能「隅田川」より “のう舟人 今の物語は何時の事にて候ぞ”』他	福井県坂井市立丸岡中学校 松野由美子
	2年	伝統の音を聴こう～音楽文化の 理解を深める授業の工夫～ 鑑賞『越天楽』他	茨城県水戸市立石川中学校 遠藤龍郎
	3年	『日本の歌』の魅力を感じ取って歌 おう～題材の連続性と発展性による 授業の工夫～ 表現(歌唱)『ふるさと』他	福井県福井市明道中学校 柳 博恵
	3年	素材を生かして音楽をつくろう ～音を音楽へと構成していく創作の 授業の工夫～ 表現(創作)	熊本県山鹿市立鹿本中学校 村上龍次

本部大会(小学校部会) を終えて～さらに来年度 の総合大会に向けて

豊島区立巢鴨小学校教諭

大川 彰

小学校部会は、東京都小学校音楽教育研究会が主体となって研究を進めてきた。研究主題に迫るために、「音楽とのかかわり」「音楽的な感受」「音楽的な深まり」をキーワードにして、各種研究会が、それぞれの特性を生かしながら研究を深めてきた。

研究授業では、子どもが真剣に目を輝かせ、音楽を聴き、感じ、表現していた。まさしく「音楽とかかわり」ながら「音楽的な感受」があり「音楽的な深まり」が見える授業となっていた。協議会では、参加者から積極的な発言があり、助言者からは、ここでの授業が新学習指導要領の内容につながっていくことも示された。

ワークショップは、各種研究会の専門性を生かして、参加者とともに学ぶ場となっていた。研究演奏は、どの演奏もつくり上げる過程で助言者のご指導を受けながら、指導者も子どもたちと一緒に一つひとつつくり上げた演奏である。主催した側ながら胸が熱くなった。東京都小学校音楽教育研究会創立50周年を記念した委嘱作品『君の笑顔が好きだから』（若松 歎 作詞・作曲）では、子どもたちの歌声とともに、若

松氏自身の指導があり、心にしみる作品を味わった。大会実行委員長の指揮のもと、参会者全員が心を一つにして委嘱作品を歌い上げ、800人近くの参加をいただいた本大会も幕を下ろした。熱気が冷めやらないまま、来年度の総合大会に向けて研究が進められている。

本大会にかかわってくださった方々に心より感謝するとともに、来年度の東京大会への積極的なご参加をお願いしたい。



中野区立啓明小学校3年生の研究授業より

本部大会(中学校部会)を終えて

町田市立南大谷中学校長
岡本喜美子

初めての本部大会を開催した。本部大会ならではの在り方として、実践発表については、発表者を全国の先生方から募り、1コマの授業公開でなく3年間を見通すことのできる実践研究発表とした。映像や実際に使用した資料を示すことで、全国の先生方に音楽の構成と実践について参考になるもの示すことができたと考えている。

「今こそ音楽！」は音楽科教員の共通な思いである。意欲的に来年度からの新学習指導要領の先行実施に取り組んでいただきたい。

教科としての音楽の大切さをあらためて認識しなおし、強い意志をもって確かな音楽教育を目指してほしい。そ



山鹿市立鹿本中学校3年生の実践研究発表より

れが音楽科の強い発信になろう。

「パネルディスカッション『音楽を科学する』や記念演奏・全員合唱に、大きなエネルギーを与えられた」「自分の授業を振り返るよい機会となった」などの感想を得て、大会は好評のうちに終了した。

次期大会information

- ◆平成21年度 全日本音楽教育研究会全国大会 東京大会
平成21年11月5日(木)・6日(金)
練馬文化センター 他
大会主題：音楽の喜びを分かち合い求め続ける心を育てよう

平成20年度 第49回 九州音楽教育研究大会 鹿児島大会 第46回 鹿児島県音楽教育研究大会 鹿児島大会

平成20年11月13日(木)・14(金)鹿児島市民文化ホール 他

大会主題：広がれイメージ 伝われおもい

研究（公開）授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	1年	ゆめのさとの一日を おんがくであらわそう 創作『ゆめのさとの一日をおんがくであらわそう』	鹿児島市立伊敷台小学校 狩川沙緒里
	2年	いい音を見つけてあそぼう 器楽『森の音がくかい』	鹿児島市立立谷山小学校 中村恩実
	3年	いろいろな音のちがいをかんじとろう 器楽『おかしのすきなまほう使い』	鹿児島市立東谷山小学校 原田尚美
	4年	「ふるさと谷山」を音楽で表そう 創作『「ふるさと谷山」を音楽で表そう』	鹿児島市立立谷山小学校 松下小織
	5年	重なり合う音の美しさを味わおう 歌唱『それは地球』	鹿児島市立伊敷台小学校 浦崎なるみ
	6年	様子や気持ちが伝わるように 演奏しよう 器楽『風を切って』	鹿児島市立東谷山小学校 南 智子
中学校	1年	アンサンブルの楽しみ 器楽『千の風になって』	鹿児島市立紫原中学校 宮之原せつみ
	2年	曲の構成を生かした表現 歌唱『心の中にきらめいて』	鹿児島市立桜丘中学校 吉倉邦子
高等学校	3年	音楽を全身で感じて表現しよう 歌唱『うたをうたうとき』	鹿児島女子高等学校 盛山春樹

鹿児島大会を終えて

さつま町立盈進小学校教諭
徳田豊志

「広がれイメージ 伝われおもい」を大会テーマに、約500名の先生方の参加をいただき、11月13日・14日の両日開催した。大会参加の先生方の利便性を考え、1日目を午後からの開催にし、公開授業と研究協議のみにした。2日目は、午前には辛島美登里さんの記念講演、午後は幼稚園から特別支援学校までの研究演奏を実施した。この日程で開催すると、九州各県の先生方が1泊2日の行程で参加できるメリットがある。

今回の大会は、新学習指導要領の告示を受け、音楽教育の重要性や学習指導のあり方などを見つめ直し、併せて移行期を見据えた大会にすることを研究の柱においた。公開授業では、子どもたちがイメージを広げ、自分たちのおもいを伝えようと一生懸命に取り組んだ。また、研究演奏においては、作曲家の松井孝夫、鶴田陸夫の両氏に委嘱した作品を2つ発表したことも大きな成果として挙げられる。

全体的に見ると、成果の多い大会であったが、課題もある。昨今の財政難のあおりを受けて、鹿児島はもちろんのこと、他県からの大会参加者が減少してきていることである。8年前の大会に比べ約200名少なかった。今後も

この傾向は続くと思われるので、大会のあり方を検討する必要があるだろう。

沖縄大会に向けて

西原町立西原東中学校教諭
上原隆雄

「思いをもってつたえよう 音の世界」を大会主題とし、平成21年11月19日（木）、20日（金）に九州音楽教育研究大会 沖縄大会を開催いたします。

今大会の大会主題は学習指導要領の改訂をふまえ導きだしたものである。生涯にわたって音楽を愛好する子どもの育成を目指し、これからの音楽教育の方向性が深められるよう各校種（小学校1学年から6学年、中学校1学年から3学年、高等学校、特別支援学校）の授業研究を進めていきます。

大会2日目の記念演奏では沖縄の児童生徒の音楽活動が伝われば幸いに思います。また世界で活躍するヴァイオリニスト「五嶋みどり・龍」の母である五嶋 節さんの記念講演を予定しております。

この沖縄大会は、九州音楽教育研究大会が第50回という節目にあたり、これからの九州音楽教育活動の発展の橋渡しとなるために、多くの音楽教師が集い熱く語り合うことができればと思います。



鹿児島市立東谷山小学校3年生の研究授業より



研究演奏：鹿児島県立鹿児島聾学校（和太鼓）

次期大会information

- ◆平成21年度 第50回 九州音楽教育研究大会 沖縄大会
平成21年11月19日(木)・20日(金)
浦添市でだこホール 他
大会主題：思いをもって つたえよう 音の世界

平成20年度 第39回 中国・四国音楽教育研究大会 香川大会

平成20年11月14日(金) 三木町文化交流プラザ メタホール 他

大会主題：感じる心 響き合う喜び

研究（公開）授業の題材

	学年	題材・授業内容・主な教材など	授業者
小学校	1年	すてきなおとをつくろう 器楽、創作『おもちゃのシンフォニー』	三木町立白山小学校 中田由紀恵
	2年	あそびうためぐり 創作『やおやおみせ』	三木町立平井小学校 川松幸子
	3年	様子を思いうかべて 鑑賞『白鳥』	三木町立氷上小学校 野口静香
	4年	音楽で校内の お気に入りの場所をえがこう 創作	三木町立白山小学校 植田典子
	5年	アンサンブルの響きを感じて 歌唱、鑑賞『歌曲「ます」』 『ピアノ五重奏曲「ます」第4楽章』	三木町立氷上小学校 安西幸子
	6年	思いを歌声にのせて伝えよう 歌唱『ふるさと』	三木町立平井小学校 泉 和子
中学校	2年	イメージに合った表現の工夫をしよう ～わらべうた風のふしづくり～ 創作	さぬき市立天王中学校 橋本えい子
	2年	文楽の表現を味わおう ～義太夫節 から聴き取る文楽の表現～ 鑑賞『新版歌祭文～野崎村の段』	東かがわ市立大川中学校 植松咲子
高等学校	1年	創る喜び、伝える楽しみ 創作	高松第一高等学校 村山修一

香川大会を 振り返って

高松市立国分寺中学校長
岡 三雅

香川大会では、大会主題を「感じる心 響き合う喜び」とし、各校種別に研究主題を設けた。これまでの音楽教育で大切にされてきた感じる心、そして、友達と通い合う心を大切にしながら、ともに音楽を表現し、つくっていく活動を中核にした音楽活動こそが子どもの生きる力を育むことにつながると考え、このテーマを設定し、実践してきた。

幼稚園1園、小学校3校、中学校2校、高校1校は、早い校種は2年前から準備にかかり、今回の大会を迎えたが、それぞれに「音楽とは」「感じるとは」など常に問いながら研究授業を重ね、研究推進してきた。また、研究演奏では、県下の代表として各校種から一校園ずつ参加した。この研究演奏のために幼稚園から高校まで各校種の特徴を生かし、かわいらしく、力強く、格調高く、また讃岐をイメージしたり、現代っ子の素直な姿を創作したりした曲などもふんだんに入れ「感じる心 響き合う喜び」を表現し、この大会を総括した。

島根大会(出雲会場)に向けて

出雲市立旭丘中学校校長
岡田正樹

第40回中国・四国音楽教育研究大会島根大会が、平成21年11月13日(金)に、出雲市において開催されます。「広がれ!響きあう音楽」の大会主題の下、保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校の5校種の授業が公開されます。①音楽の要素や仕組みを理解し、表現や聴き方を工夫する音楽活動の在り方 ②学習過程における学び合いの場の工夫 ③個に応じた指導と評価の工夫、などに着眼して研究を進めています。そして5校種による合奏、合唱、吹奏楽、和太鼓、などの研究演奏を予定しています。

全体講師として文部科学省の高須一先生、記念講演者として作曲家・合唱指揮者の松下 耕先生をお招きいたします。

出雲市は吹奏楽、合唱ともに全国トップレベルです。日本歌曲の第一人者の青山恵子氏、オペラ歌手の錦織 健氏、福島明也氏、さらにはシンガーソングライターの竹内まりや氏を輩出したのも出雲市です。こうした地域の音楽的な基盤を生かしながら、新学習指導要領の「改訂の趣旨と要点」を授業実践などで提案していく大会にしていきたいと願っています。



東かがわ市立大川中学校2年生の研究授業より



研究演奏:高松市立国分寺中学校(合唱奏)

次期大会information

- ◆平成21年度 第40回 中国・四国音楽教育研究大会 島根大会
平成21年11月13日(金)
出雲市民会館大ホール
大会主題: 広がれ!響きあう音楽

エッセイ

風の音

前田美子

Maeda Yoshiko

6月14日快晴。 大山登山。

「あ〜、あそこが開拓村で、えらい苦勞だったそうですよ。ネエM社長！」後方に向かって同意を求める。

「何の話？開拓…？ わしのほうにふうな〜な（振らないで）そっちで責任もって答えなさい（答えなさい）。こっちは歩くだけだけん」

「僕は山じゃなくマラソンが好きなんです。あっちこっちのマラソン大会に走りに行くのです。友達もいっぱいできてねえ…。そう、毎日トレーニングしていますよ。“辛いのに何でそげんな所まで行って走る？”ってよく言われます。いや苦しいけど走り終わってのビールが旨くてね。走りながら道端に転がっているへこんだビール缶を見ると、喉がゴクン！と鳴ってねえ。そういう時は、終わったらもっと高いビールを飲むんだから！飲ませてやるから!!と自分に言ってやるんです。今日も飲みますよ、きっと旨いですよ。」

「この大山は「伯耆富士」と言われて関東の富士山と同じに美しいのです。富士山には登りましたか？この伯耆富士は、遠目に美しいのに近年は崩壊がひどくて、ルートもね、限られていて、登るには足もとが火山砂礫できついですね。——そこ滑りますよ」

K氏は二番手をモタモタ歩く私に気を遣って、たくさん話しかけ励ましてくれる。

「やっぱり鳥取は暗いですか。重い感じですか。他所の人間は皆言うんですよ。だいたい表日本、裏日本でしょう。山陽に山陰、まだまだ有りますよ、

妙な言い方が。何言ってるんだ、日本の文化の原点は日本海なんです。でも伯耆男や因幡女といった言い方は気に入っています。ネエ、M社長!!」

「そっちで責任もって話してごさない。こっちに振るやい。さっきから言っとうがん…」

山陰に来るようになったのは、学生の頃だった。リュックを担いで、時間を止めて山陰線を使って九州に向かうのを定番コースにしていた。好きな風景を見つけては途中下車をとり、バスが来れば乗る、また乗り継ぐ。こっちの浜、あっちの寺とふらふら。浜で仕事をしている小母さんとおしゃべりをしたり、ラッキーな時は漁師さんのギッチョン船（伝馬船）に乗せてもらえることもあった。海は深く、それなのに深底の岩までしっかりと見える透明な海。遠くに箒の裾野をどこまでも伸ばす「大山」。「伯耆」は「箒」なんだ、と納得させられた。水平線にゆっくりと落ちていく夕陽は、神秘そのもの。強い光ではなく柔らかな光なのに、確かなものを心の奥にたたみかけていた。

「ずっと雨の日が続いて今日は無理かと思ったのに、いや〜、空気が澄んでよく見える。出雲の神さんが『大山』に網をくりつけて“くにこ、国来!!”と引っ張ったから島根半島が出来たそうです。島根半島に弓ヶ浜、空港が。ほら、あの病院の建物あたりが、先生の泊まられている所です。城が残っていたらな〜」

晴れ上がった大山頂上からの眺めは、素晴らしい。長く広くひろがる裾野に牧場が牛を遊ばせている。

このところ米子城跡近くに泊まり、その周囲を朝の散歩コースにしている。米子城は、小高い山に位置し、海を近くに眺め、もう一方には「大山」を据えるという贅沢なものだが、明治に入り城を古材として風呂屋に売却されてしまったとか。今は石垣と石段と椿の木と雑林が残るのみ。惜しいなあ。

でもこの絶景だけは残されていた。本当に登った者だけがもらえるご褒美の展望は、また行きたくなる。

「あの弓ヶ浜^{わた}に棉が一面に植えられていたそうですね。どんな風景だったのでしょうかね」

棉から綿を取り、糸を紡ぎ、弓浜^{ゆみはま}餅を織^{がすり}って境港^{さかいみなと}や橋津から積み出されたこの米子餅は、女性の大きな労働力が支えたのだらう。また、鉄が取れる中国山地からは、綱製品の農機具等も積み出されたと聞く。鳥取民芸美術館や、柳宗悦^{やなぎむねよし}の「民芸」という言葉の中にも、庶民の力強さが生活という基の上に立っての芸術というか、鳥取の人となりを感じさせられる。

「砂丘は、どの辺ですか？」

「砂丘は好きですか？ 昔は、あの砂丘にえらい難儀をしたそうですよ」

「何度か行きました。『砂の女』という映画も良かった。あの風が描く風紋がいいです。でも最近行ったら草が生えていて、何か荒れているようでした。



草を取って大切に保存しなくちゃ。入場料を取る時、袋を渡して草を抜いてくださいと頼むといいのに。袋いっぱいにした人には半額お返しとか…。だめかな。今は人が入り過ぎなのかな。靴底を洗って入るとか工夫したらいいのに」

「今、らっきょうが盛んに栽培されていてね、砂が役に立っているんですよ」

「あの大きならっきょうは、美味しい。私、一番好きなのは白イカ、それから蕎麦。蟹もいいけど」

「じゃ、山から降りたらビールと白イカだ!!」
とK氏が横から声をかける。

「東伯^{とうはく}の西瓜^{すいか}の時期になると、東京のモノレールの階段の手すり、エスカレータの手すりは「鳥取のスイカ」と長い緑と赤のシールが貼られるんですよ」

「西瓜も有名人だ。梨は、どうですか」と、お国自慢が誰からともなく始まる。

食べ物の話はいい。皆が共通で楽しくなる。昨夜も、大山登山前夜祭と20名程が、大山地鶏のすき焼きと焼き鳥を中心に盛り上がったばかりなのに。

この日のメンバーは、中国四国音楽教育研究大会で、ともに力を合わせ、

子どもたちの元気をもらい、そして子どもがもっと輝くようにと奮闘をした面々。食べても飲んでも、子どもたちのこと、音楽のことばかり。自画自賛も入りながら、子どもたちの可能性、子どもたちの表現、——子どもたちの成長を称える先生という仕事はいい。やり遂げた時にもつ真の喜びで大いに盛り上がった。

その中の何人かでの大山登山だ。社長が3名、副社長が1名、社員が6名というパーティーだった。

下山して振り返った「伯耆富士、大山」は、またもとの美しい姿を見せていた。

ビールの乾杯ではなく、真っ先に口にしたのは、牧場絞^{まぎ}りたてで作ったソフトクリームだった。

ああ、旨し旨し!!

みなさん みなさん だんだん (ありがとう)。

また行きたい!!

●まえだ・よしこ

東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。

現在、東京女子体育大学講師。むさしのジュニア合唱団「風」指揮者。全日本合唱教育研究会理事。

著書に『子どもと歩く』『レパートリーを広げる小学生の合唱 (CD付楽譜集)』など (いずれも音楽之友社)。